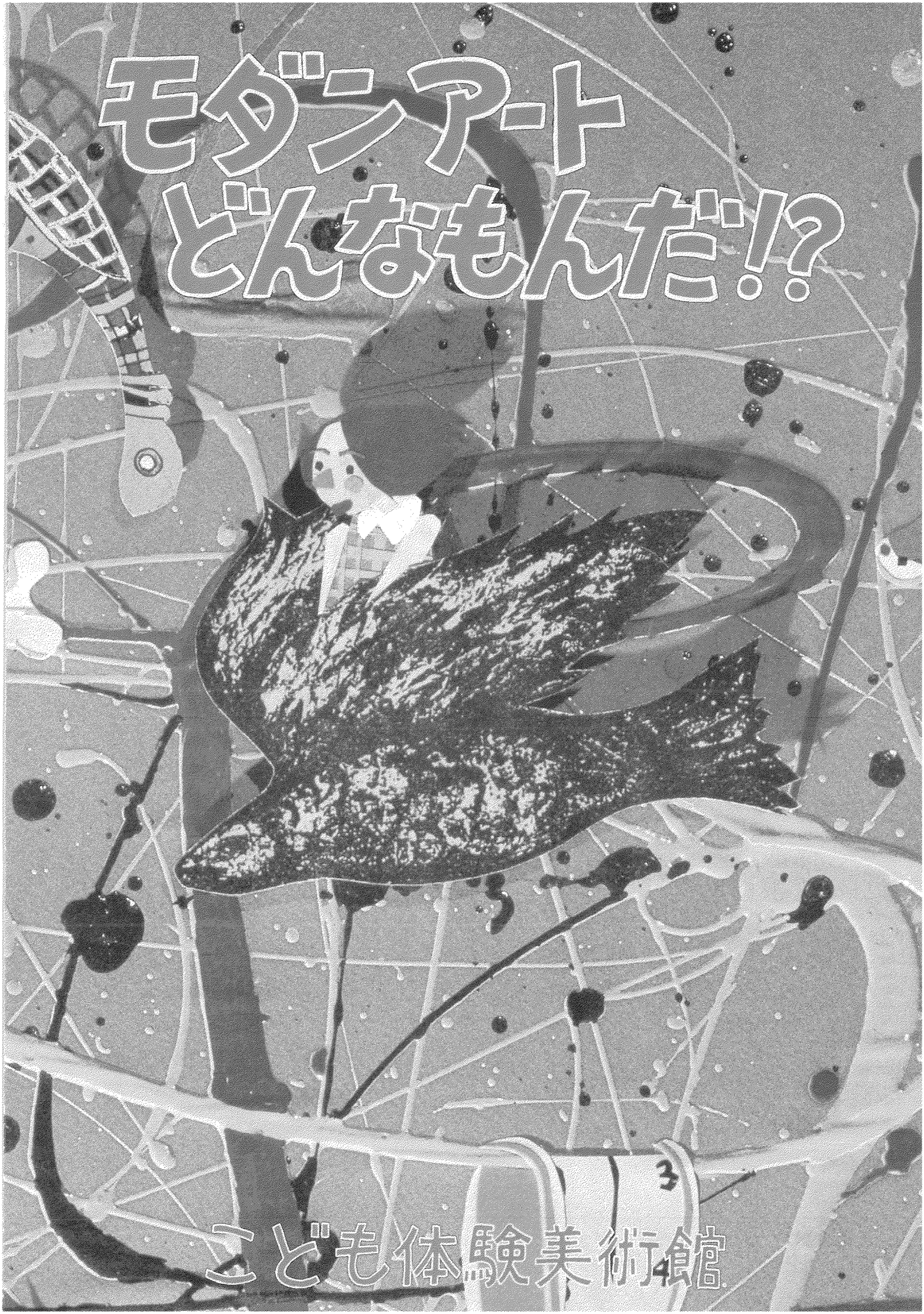

モダンアート
どんなもんだ!?
3
こども体験美術館

はじめに

このたびセゾン美術館およびグッゲンハイム美術館の多大な協力のもとに、モダンアートの傑作30点（原寸大の写真複製）を私たちはギャラリーに展示し、こども体験美術館「モダンアートどんなもんだ!?」を開催することができました。私たちはこの体験美術館において、子どもたちがこれらの作品と何の前ぶれもなく出会い、鑑賞し、その体験を基盤に制作できる環境を設置しました。子どもたちは作品に出会いながらも、頼れるのは、自分の直感と感性だけです。彼らは、それを羅針盤にモダンアートの海を航海することになります。その体験でえた色彩やフォルム、ムーヴマン、バランス、マッスなどの造形感覚こそが心身の深いところに沈殿し、豊かな感性を養い、本当の知識が根づく土壌を形成することになります。マルセル・デュシャンはこう言っています。「創造的行為は芸術家だけによって演ぜられるのではなく、鑑賞者はその内的な質を見わけ解釈することによって、外部の世界との触れ合いを作品にもたらそうとすることで、創造的な行為に参加するのである」

物が溢れるほど豊かにある現代においてこそ子どもの情操豊かな発達に最も必要なものは、五感を通じてえた、〈体験〉なのです。この美術館は、子どものみならず、モダンアートの苦手な大人にとっても鑑賞するということを再考する新しい体験の磁場になると確信しております。

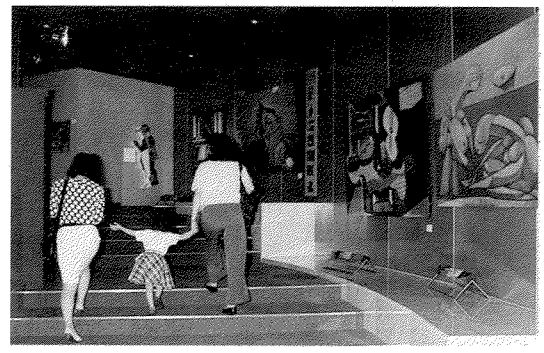
最後に、この企画を実施するにあたり、ご協力をいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1991年7月　こどもの城

後援　セゾン美術館
ソロモンR. グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）
朝日新聞社

協力　富士写真フィルム
美術出版社

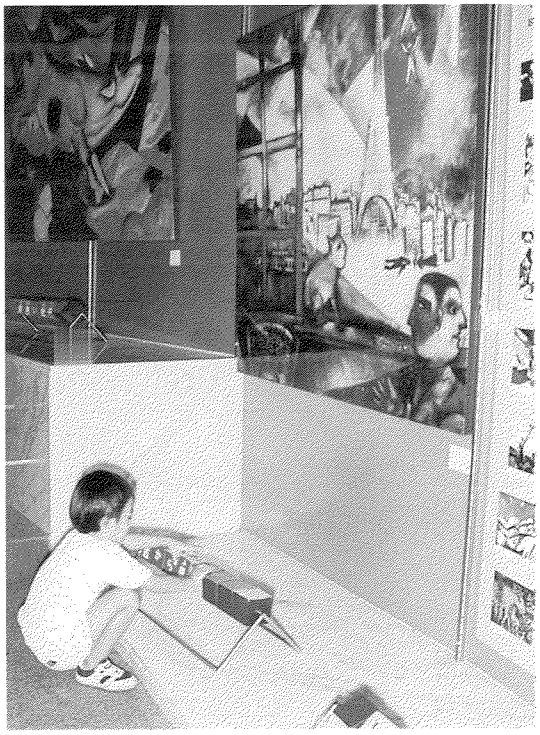
モダンアートと子ども



子どもが最初に出会う抽象形態の一つに丸があります。自分が見るひとつひとつの対象物、例えば大好きなお母さん、あるいはぬいぐるみなどの存在を確認し、それを丸に表現します。それから、成長に伴い徐々に三角、四角と形を判別していきます。モダンアートの作家たちは、20世紀初頭、物を自分の感じたように描いたり、自分なりに法則を見出そうとして作っていきました。それらは、子どもたちが、特に幼い子どもたちが物を描いたり、心の思いを表す時と変わりありません。大人の場合、芸術が社会の中でどのような位置にあるのか、歴史的な意味合いを考えていきます。そして、それ以前の芸術の意味や形態あるいは様式に対して、それを乗り越えようとしたり、アンチテーゼを立てようとしたり、常にそれまでの作品群との関わりの中から作品が生じています。子どもたちの表現は大人との単純な比較において、未発達、未成熟あるいは未経験からきた〈省略された〉抽象化と見られ、それが形、色ともに原初的な方法をとっていると見なされます。子どもたちは後に写実にあこがれる時期を迎え、それからまた抽象的概念をもつようになるという心理学的な考えがあります。しかし、アフリカの子どもたちの表現は、はたして写実的な方向にむかう時期があるのでしょうか。このように考えていくと、環境による影響はたいへん大きいといえます。

子どもたちが、モダンアートと出会うとき、それは、大人が見たりあるいは描いたりする時とは異なり、とても素直に“なんだこれ？"といった疑問をもちます。そして、芸術として身がまえることなく、“これ何だかわからないけど、おもしろい"といった具合に、抵抗なく作品と対することができます。これからの21世紀は今まで以上に先読みできない未知数であることを考えると、モダンアートと子どもの関係は、新たな胎動の始まりを予感しているようにみえます。なぜなら、世紀末から今世紀の初頭にかけてモダンアートのさまざまな様式には、それ以前の一つの流れから、多岐にわたって拡がっていく始まりで、それは全体から部分への移行であり、次にはまた再生するという、宇宙万物の輪廻のような動きにしっかりとはまっていくように思えるからです。キュビスム－多視点から見たものの集束、シュルレアリスム－無意識の世界を描く、新造形主義－垂直水平に交わる幾何学的かたちと三原色に絵画の要素を限定、抽象表現主義－描く肉体の行為を強調、未来派－速度、動きを取り入れる、ダダ－それまでの絵画を否定、構成主義－丸・三角・四角の形にそのものに美を見出すといったようにそれぞれの動きをまとめてみると、これらは子どもたちが大人になる時に通過する様々な状況に符合する気がします。

モダンアートの開花は、子どもの成長のように人間性への新たな



軌道転換だったのではないでしょうか。そしてモダンアートと子どもとの出会いは、当然の成り行きとして、子どもに自然に受け入れられるのではないでしょうか。

こどもの鑑賞体験

子どもたちは今、生活の中で様々な色と形に出会う機会をもっています。テレビのコマーシャルやデパートのショーウインドー、あるいは遊園地や公園の遊具など。その他、色とりどりの絵本やオモチャ。子どもたちはすでにそれらを新しく出会う自分を刺激する物として捉えることはありません。まさに、環境の一部として捉えるのです。そのような生活空間で、美術館の中に存在する造形作家の特有な色と形による作品群は、子どもにとってどのような意味をもつものでしょうか。子どもは何を美術作品として感じ、何を芸術と捉えるのでしょうか。

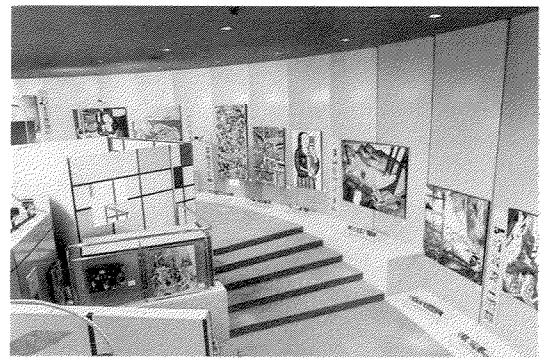
子どもたちにとって、美術作品とは視覚にはいってくる物、物体にしかすぎません。それは、とりも直さず、大人が美術品として珍重する物であると子どもたちに教える認識によるものです。そして現代の子どもたちは大人の意識を察知する能力によって先回りし、識別して美術作品としての存在を他の色や形のある物から区別していることが多いのです。今日、子どもたちは本当に興味深いものかどうかの判断、本来の意味での鑑賞する体験が必要になっています。

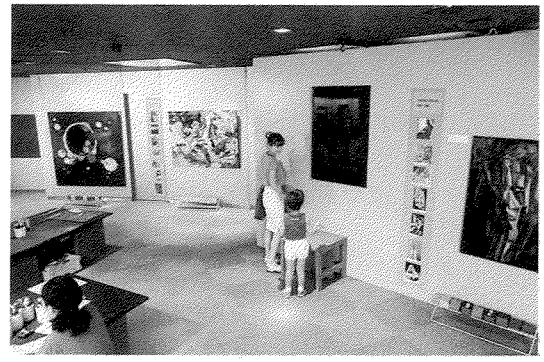
子どもが行う鑑賞とは、物を見たり、触ったり、さらに変化を与えたり、対象物に積極的な行動をおこすことです。つまり、見る対象物と充分に遊ぶことです。大人にとっては美術作品であっても、子どもにとっては初対面の壁掛けといえるでしょう。子どもは美術作品としてよりもその物が置かれている状況によって、それを何かと推測します。初対面の時に、その美術作品の価値やその背景に関心をもつより、それが自分にどれだけの興味を抱かせるかによってつまり対象物が自分にとってどんな価値をもつのか判断を行うのです。そのものと遊んでやっていいものなのか、悪いものなのかという自己判断です。作品と遊ぶこと。もともとアートとは、生来人間の遊びであったはずです。ある時期の絵画が宗教的な意味をもっていた時を除けば、美術作品は人間の生の喜びとして、子どもにおける遊びの体験に類するものです。子どもたちが、本来の「遊び心」から作品とつき合う方法は、子どもたちの生活空間から始まり、美術作品へと近づき、そして、日常の中へ戻ることです。

こどもの城のギャラリー（１Ｆ）と造形スタジオ（３Ｆ）では、美術作品（複製）が置かれる状況を従来の鑑賞だけの静的な空間から、造形行為を営む動的な空間に設定し、子どもたちが自ら興味を

もってかかわることができるように《仕掛け展示》を試みました。

マルセル・デュシャンという造形作家は生活の中から日常品を取り出し展示しました。たとえば、トイレの便器を美術館に置きました。その当時の反響は、大変なものでした。反発と賞賛の渦が巻いた後、その行為は後の世界に大きな変化をもたらしました。そのことによって観衆は展示した日常品さえ作品として捉え、それに美術価値を付与していったのです。デュシャンが美術館に日常品を投げ込んだのとは逆に、美術館から美術作品を引きおろし、日常の中で触り、変化・実験させ、子どもたち自身が手や眼を使って、彼らの感受性のもとに扱うことが、子どもたちの鑑賞体験です。この方法は従来の大人の鑑賞とは違う試みです。子どものための鑑賞体験を促すこの方法は、造形教育にかかわる人々の間に物議をかもしだすかもしれないとしても、すべては空虚な理論より、現実の実践の中から確認され、実証されなければなりません。そして、私たちは、この企画のその本来の意義を理解してもらえるものであることを確信しています。





美術館の中の展示室に整然と並べられている一つ一つの作品には歴史があり、それを生み出した造形作家がいます。子どもの回りの大人は、その成り立ちを、言語で子どもたちに解き明かすマジシャンではありません。作品との最初の出会いを、子どもの生活エリアの中に置き、子ども自らがそれに近づいていくように子どもの興味と作品の本質との間に接点を見出すように、仕掛けることこそ、大人の重要な役割です。そこでは、子どもに接する大人のモダンアート作品に関する感受性の豊かさが深く関与してくるのです。

子どもたちはかかわる対象や現象に反応しながら、作品が楽しく遊べるものであるか否かを確認し、その体験に積極的に参加するかどうかを選択します。実物にかかわる時の緊張感は、その意味を視覚的に捉えようとする意志がない場合、苦痛を伴う経験として蓄積され、二度と作品と出会おうとはしないでしょう。そこで、なおさら五感による鑑賞体験が重要です。

モダンアートとはどんなものであるか「遊び心」をもって接触できるように構成された展示空間およびワークショップ。「難解である」と思われる今世紀前半のモダンアートも子どもの目でみれば新しい視点も展開されることでしょう。ギャラリーに展示される作品は、セゾン美術館(1991.6.20-9.1)に行けば本物を見ることができる、原寸大の写真による複製です。

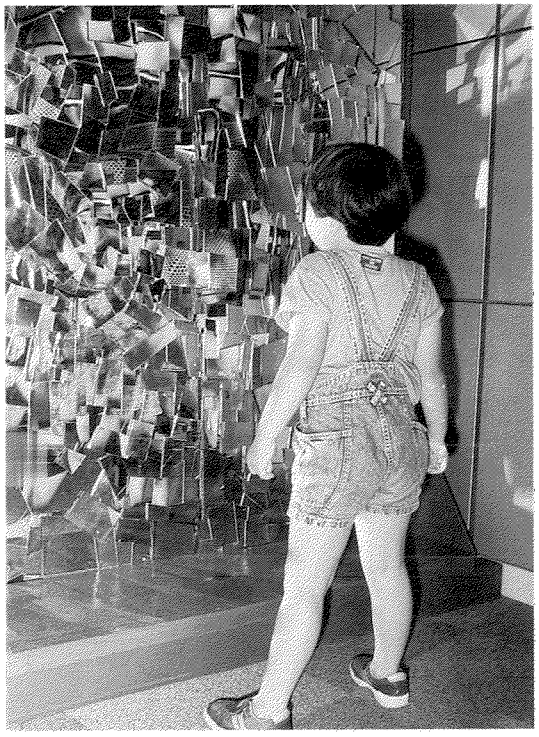
子どもたちが参加発見を促す仕掛け展示空間での体験を踏まえて、本物を見れば、さて、モダンアートはどのように見えるでしょうか？

ギャラリー展示とワークショップ

こども体験美術館“モダンアートどんなもんだ!?”は、ギャラリーと造形スタジオの２つのスペースで実施されます。

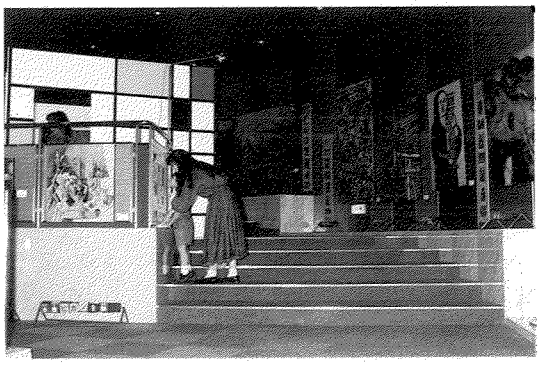
ギャラリーでは、グッゲンハイム・コレクションの原寸大の写真パネルを展示し、子ども自らが積極的に「見る」体験に参加できるように、同時にワークショップを行います。

会場の入口前には、大きなカルダーばりのスタンディング・モビールがたっています。全体で５ｍの高さのそのモビールは、和紙と竹で動く部分が作られ、会場内でそのゆるやかな動きを表し、訪れる人々に新鮮な空気の流れを見せています。会場のまわりには、子どもたちのシルエットがモダンアートの絵の服をまとって立っています。入口には、今回出品されているモダンアートの作家たちの作品をコラージュ風に描いたゲートがあり、子どもたちはそこをくぐりぬけることで、モダンアートとの出会いの洗礼を受けます。



展示場には、実物大の大きな写真パネルが壁面に吊るされています。写真からでも、作家の感情やそれぞれのきっぱりとした表現の違いと雰囲気が伝わってきます。ドローネ、シャガール、マルク、ピカソなどさまざまな作風が同居し、お祭りのようなはなやかさが感じられます。作品の横には作家ごとに作品年表をたて、作品の流れを一望できるようにしています。作品の下には、子どもたちがサイコロの一面を同じ色にあわせることによって、作家名・作品名・制作年代がわかるように木でつくった参加型キャプションがあります。子どもたちは、手でそれぞれの一駒のサイコロを回しながら、名前や作品名に出会っていきます。

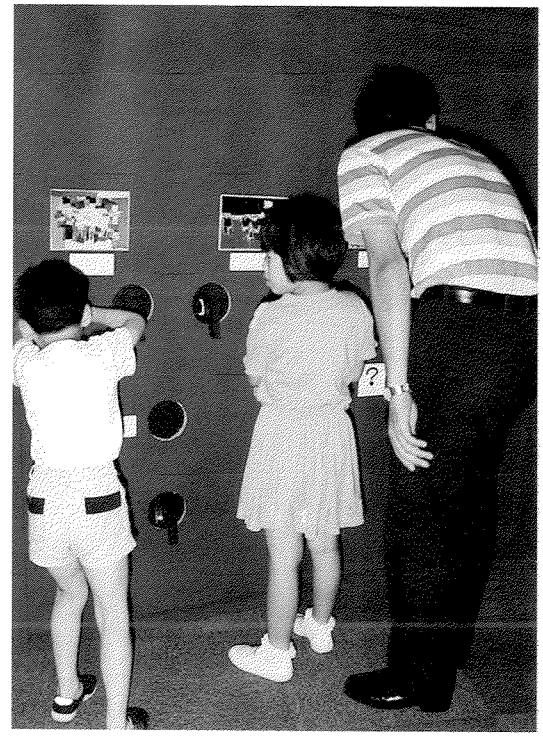
展示場には、《キューブなわたし》のコーナーがあります。そこには、小さなピースに切られた鏡がはりめぐらされているボード（２ｍ×1.８ｍ）があります。微妙に重ねられ角度がついているためいろいろな方向から見えた多くの片が一つのボードに組み合わされているように映っています。その前に立つと、まるでキュビスムの作品の前にたっているように、自分の顔や体が分割されて映ります。そのコーナーには、ピカソ、ブラック、グレーズなどの作品の写真パネルを展示し、キュビストたちの考えを自らも参加して体験できるのです。



隣のコーナーには《モンドリアンの部屋》があります。モンドリアンが新造形主義として、水平と垂直さらに三原色に限定していった絵画の要素だけで壁を構成しています。モンドリアンが自分の部屋の中の方形の黄色を、気が向けば自在に動かしていたように、《モンドリアンの部屋》の中では、赤いテーブルが置かれ、マグネットによって赤・青・黄色の長方形の位置が自由に動かせるようになっています。一面の壁には、複製写真の「生姜壺のある風景Ⅱ」が展

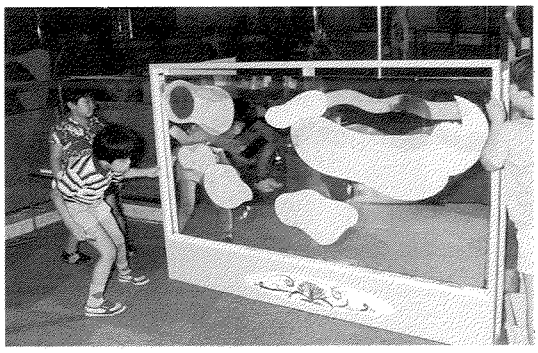
示されています。それは、モンドリアンが水平と垂直の抽象絵画に移行する時の最も顕著に変化が現れた作品であり、単純な部屋との比較から、さらに極限に単純化していったモンドリアンの突き詰めた思いを想像することができます。

この“こども体験美術館"には、本物の作品がありません。しかし、子どもたちは作品の色と形をおおらかな気分で見ることができます。なぜなら、通常の美術館のように、大人たちの「気をつけてみましょう。静かにね」という注意の言葉はないからです。材質があまり感じられない作品写真から、本物の触覚的な見方をするために、キャンバス地に様々な触覚の絵具や材料をのせ、マチエールの体験ができる部屋を作りました。青い《手触りの部屋》です。展示壁にかけられたデュビュッフェの「ミス・コレラ」がどのように描かれたのか、子どもたちが「見る」ために、触るのです。子どもたちは、壁に開けられたたくさんの穴に手を入れ、おそるおそる触っては、手を敏感な目にしながら、絵の触感を試してみます。さらに、ブランクーシやジャッコメッティ風の立体物の塊を両手で探り、「さわる」という行為から彫刻の空間と実体を体験するのです。その他、モダンアートで使われている金属、石、木など、いろいろな素材の触覚体験をします。　展示場の右手の壁には、レジェの「花瓶をもつ女」や「建設現場」そして、エルンスト「接吻」、ピカビア「世にも不思議な絵画」がかけられています。その大きな絵からはそれぞれの作家が様々な独自の描き方で表現してきたことが、それぞれの比較と相違から、大きさからくる迫力とともに一目瞭然です。

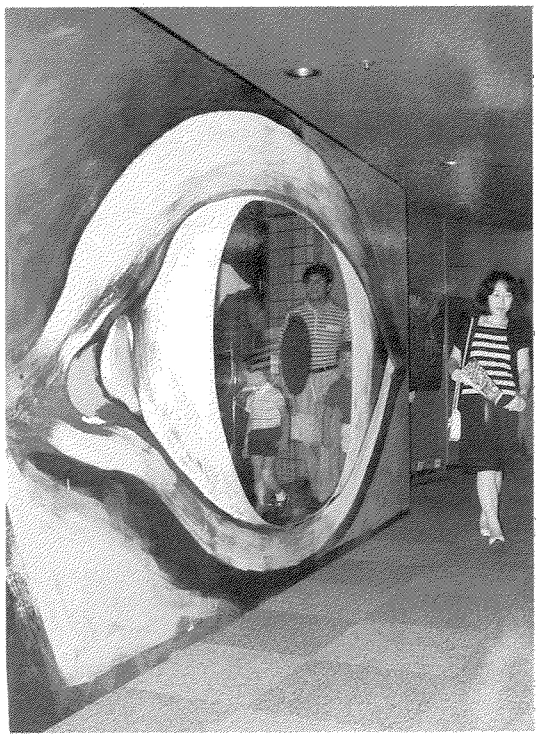


ギャラリーの２階に、ストロボの部屋があります。デュシャンが1911年に「階段をおりる裸婦」や「汽車に乗る悲しめる青年」を描いた時、“動き”が平面の絵画の中に表れています。それは、当時のキュビスムと未来派の動きや速さの影響があります。それはその後モダンアートに様々な影響を与えてきている重要な絵の一つです。子どもたちは《ストロボの部屋》に入ると、ストロボが間断して光を放つ中で動き回り、友達の姿に残像による動きの像がとらえられるのです。子どもたちが動きの描き方より「動き」そのものを楽しむことによって、その絵に近づけるよう試みた部屋です。

ストロボの部屋を出た同じフロアーでは、子どもたちは「もしゃもしゃバッジ」をつくることができます。これは、作品を模写するという意味から名づけたものです。カンディンスキーの「さまざまな形」やミロの「耕地」「オランダの室内II」から好みの形を写し取り、彩色は自由にします。８cm角の大きさの模写された透明フィルムはバックに違う色紙をいれて、接着剤のついているスチレンボードにつけてできあがり。名画も子どもたちの手にかかっては、展示場の中で即座にバッジになってしまいます。

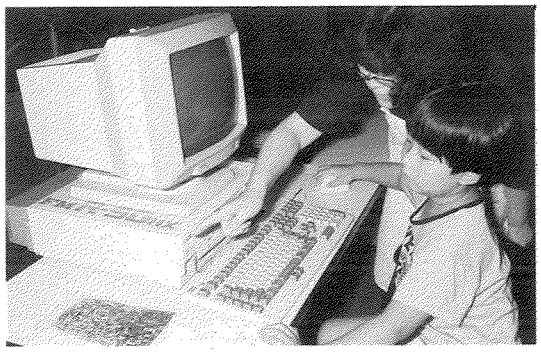


その傍らにはまた、《モダンアート・コロコロ》と名づけたおもしろい手作り機械があります。セロテープの芯の両サイドに色つきのゼラチンフィルムを丸や三角や四角の形にデザインしてはります。それを光を投射するその機械の差し込み口にいれると、下り傾斜のついた板の上を光を浴びながらコロコロところがり、まるで、ドローネーの「赤いエッフェル塔」の中を輝く光のように、また「環状の形態」の円のように、いきいきと動き子どもたちの心をはずませます。ギャラリーのその先には、マグリットの「目」の大型版があります。雲のある空と目の間を子どもたちは通り抜けることができます。わたくしたちが、モダンアートと出会う最初のきっかけは〈目〉であり、その象徴として、大型の目は、モダンアートとさまざまな出会いをする子どもを見つめます。その横の壁には、マグリットの窓があります。おだやかな空がその窓から見えます。その窓を開いてみると、「大気の声」が見えてくるのです。



次の細い回廊の部分には、タンギー、マレーヴィッチ、クレー、リシツキー、デュビュッフェなど、比較的小さい作品が個性を放ち独自の語りかけで、子どもたちの目に訴えかけます。子どもたちには、直観的に好きなもの、嫌いなものがあります。しかし、次にくるコンピューターやＡＶ機器がセットされた最後のコーナー、CGV鑑賞実験室で、それらの絵を使って遊ぶことによって、見慣れない形や色も、親しいものにならざるをえません。パズル化したり、部分をはりあわせたり（コラージュ）あるいは記号化する遊びです。さらに、《ブルーバックの部屋》では、絵の中で自在に動くことができます。「吹雪のあとの村の朝」の中で、村人と歩いたり、「建設現場の男たちとロープ」の一員になって梯子に登ったりします。

このような展示を仕掛けたギャラリーでは、子どもたちが遊び感覚で物を見、触り、動かして、ダイナミックな鑑賞体験をします。この他に、物の形を注意深く見ながら、さらに、子ども自身が絵の中で独自の発見をするよう促す言葉がけの質問が書かれてる用紙〈ワークシート〉があります。ほとんどが、絵で質問に答えるようにしています。なぜなら、物の見方のプロセスが子ども一人ひとりでことなり、一律の正しい回答というのはないからです。たとえ、制作年代や作家名や様式を覚えたとしても、それは、鑑賞ではありません。絵の中のどんなものに何を感じ、自分なりに受け取るか、それを、心に響かせていくかが大切なことです。ですから、このワークシートは、作品解説と併用して、子どもたちがより作品と親しくなるようにするきっかけです。それによって、どんなものに対しても、「そんなの知らない、むずかしい」という前に、「それってどんなもの？」「モダンアートどんなもんだ？」と積極的に興味をもつ気持ちを養うことにあります。



そして、そのような関心事に「こんなもんだ！」と自分なりの意見をもつことができる主体的な「見る」体験を促すことが、この「こども体験美術館」の大きな目的なのです。

子ども体験ワークショップ

造形スタジオのこども体験美術館 “モダンアートどんなもんだ!?” では、子どもたちがモダンアーティストたちの作品に関連した制作プログラムに参加します。年齢を問わず気楽に制作できるプログラムを「体験フリー・ワークショップ」、小学校２年生以上がじっくり時間をかけて制作する活動を「造形実験室」と名づけました。モダンアートとは、つきつめると、アートに関しての個人の感じ方、考え方を色と形によって表していったものだといえます。それを考えますと、子どもたちがモダンアーティストたちの作品を鑑賞するということは、作品へ自然にかつ楽しみながらどれだけ深く入り込めるか、また近づけるかが、プログラムを設定していくときの鍵になります。

「体験フリー・ワークショップ」では、幼児も参加可能な活動になるように、グッゲンハイム・コレクションの中から適当な作品と作家を選び、プログラム制作を行いました。私たちは、作品を見る場合モダンアートに限らず、直観的な印象を基にします。そして、作家の歴史や時代背景の情報を得て、その印象を深めたり、逆転させたりして鑑賞していきます。子どもたちにとって、その直観的印象に頼る以外に情報を得る方法は、制作という過程を経ることが最良の方法といえるでしょう。今回、フリーワークショップでは、取り上げた作家の全てを網羅するのではなく、また分析的に捉えながらプログラムを構成するのでもなく、子ども自身の興味と作家の作品の表現方法を捉えて単純化した方法を作りだし、まさにｱ･ﾗ･ｱﾙﾃｨｽﾀ “A LA ARTISTA " (作家のやり方に従って) 例えば、「ミロ風に」の考え方によってプログラム作りを行いました。ミロから「そうじゃない」と反論されたとしても、でも「そうみえたんだ」と、自らの考えと感じを伝えたいとの気持ちによるものです。それは、モダンアートがそれ以前の芸術に対し、歴史の流れの中で「～イズム」として成立しようとした自由な精神となんら変わりないものとして捉えられます。そうしてみると、モダンアートの作家や作品から想像力を駆使して想像的に表現を見出すことができます。

「造形実験室」も同様に、作家の体験を追体験するために、素材や技法を試しながら、遊んでみたものです。子どもたちは、作家の作品を真似ることよりも、描かれたものから何を引き出し、自分なりに使うかを考え、全く新たなものを生み出します。それは、大人

が模写や模倣をしようと襟をただしているうちに、「これとこれがおもしろい」と、実感と直観によって自らの感受性を疑わず創造の森を探索しているのです。

子ども自らの思いや感じ方をそのまま表現してよいことを伝えるには、モダンアートの作品の様々な表現方法は絶好な素材といえます。まさにアーティスト個人の個性によっているのですから。画集と素材と道具、さらに、モダンアーティストの作風による作家名をデザインした看板がかけられた「造形実験室」の視覚による誘いかけは充分です。その造形実験室の環境の中では、子どもが発想するものを描いたり作ったりできます。大人と比較すると、作品に対する子どもたちの反応は率直です。小学校４年生以上になると、一緒に来た友達の表現が気になったり、会話をしながら制作したりします。しかし自主的に積極的に接近していく子どもの姿はまれです。大勢の子どもたちが訪れる中で、自然の流れの中から興味と関心を示し、行動に移す子どもは数えるほどしかありません。次にどうすればよいのか、随時必ず確認する子どもの数は予想外に多いものです。それは、生活の中で、一つ一つの確認を習慣づけられているからでしょう。子どもたちが「フリーワークショップ」や「造形実験室」に参加して、活動内容が自由発想を主体とするものである場合、戸惑いは隠せません。モダンアートが自由な発想に方向づいていった大きな要素の一つは、それまでの一様な美術の流れと、戦争という時代背景への反動でした。それが抑圧と規制とに要約されるとするなら、現代の子どもの生活環境は当時の状況と類似しているといえないでしょうか。モダンアートを「現代美術」とするなら、子どもたちとアートのかかわりは、「現実美術」として捉えられます。生活体験と子どもの心の動きによって決定されるべきものが、身の回りの現実のみによって左右されるからです。子どもの心の解放は、枠組の中での「自由の質的転換」に重要な意味がありそうです。

造形スタジオでは、「造形実験室」の他に「造形教室」という活動を設けました。それは、従来の造形スタジオの活動にはなかったものです。子どもたちがモダンアートと出会い少しでも深くつき合うきっかけをもってほしいために２日間あるいは３日間造形教室として設定したものです。都会の中の夏休みは、子どものスケジュールも過密です。その中で、夏休みの学校の宿題に組み込んでしまおうという親の意図のもとに子どもたちは送りこまれるケースが多いのです。これもまた「現実美術」であり、これこそ現実状況であるなら、参加意図はどうであれ、２日、３日という時間の中で子どもたちが少しでも積極的に対象物とかかわれることを目ざす以外にありません。その中から、制作することは物を見る、観る、視ることであり、自らの思いや考えを誰の、また何の妨げもなく素直に自由に話し表現することであることを実感として体験してほしいのです。

「えのぐでぺったん」── エルンスト

エルンストは表現する上でいろいろなことを試しています。物の上に紙をおき、鉛筆やクレヨンでこすっていくと物の表面がこすり出される「フロッタージュ」や色々な紙を切って貼っていく「コラージュ」、絵の描かれた上に紙を押しつけてひきはがしていく「デカルコマニー」、凹凸のある表面に紙をのせ、絵具をかきとっていく「グラッターシュ」、罐の穴に糸をとおし、そこから絵具をたらしていく「オシレーション」など、その他に紙の上に紐を投げ出して偶然できた形をキャンバスに写すなど、様々な技法を使って、不思議な世界を描き出しています。

この「えのぐでぺったん」では、その中のデカルコマニーの技法をもちいています。絵具は通常、描画が主になり、絵具そのものの素材性を手触りで体験することはあまりありません。子どもたちは絵具の粘着性やそれによってできるいろいろな表情をつや紙と透明フィルムという絵具を吸わない材料の組み合わせで作っていきます。通常のように別の色を生み出したいために混ぜるのとは異なって、絵具のねっとりした質感や絵具の混じり方そのものが奇妙な雰囲気を運んできます。絵具をたらした時の紙との色の響き合い、そしてデカルコマニーを重ねるにしたがって生じる偶然性は、子どもたちが遊びの中でそのプロセスを楽しむのと全く一致した喜びがあります。絵具の触覚体験です。

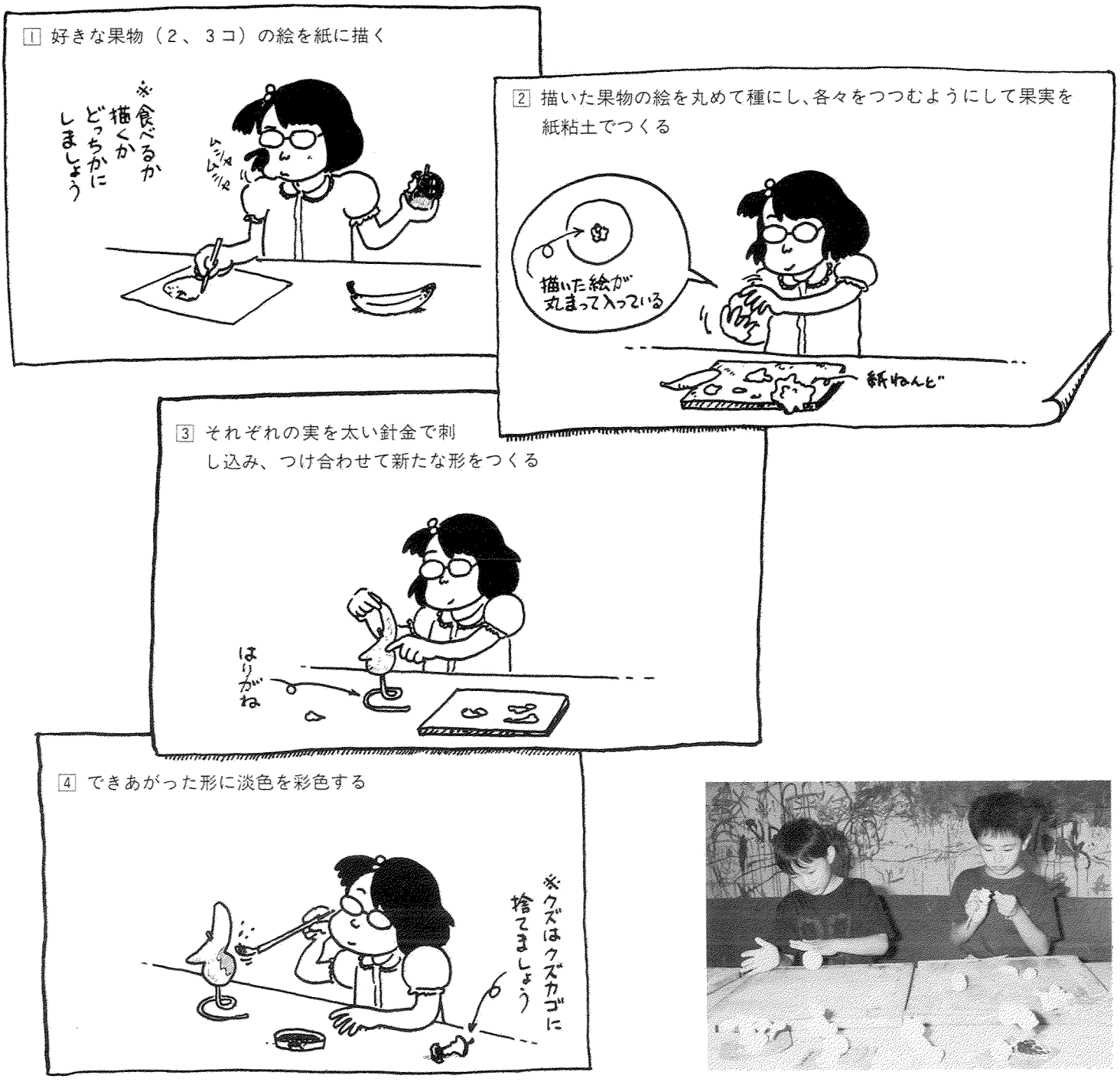
1 つや紙の上に絵具を少量たらす

2 円筒形にした透明フィルムで絵肌をつくりながら彩色していく

3 できあがった絵具模様を切り紙をし、別のつや紙に貼りつけて連想する世界をつくっていく

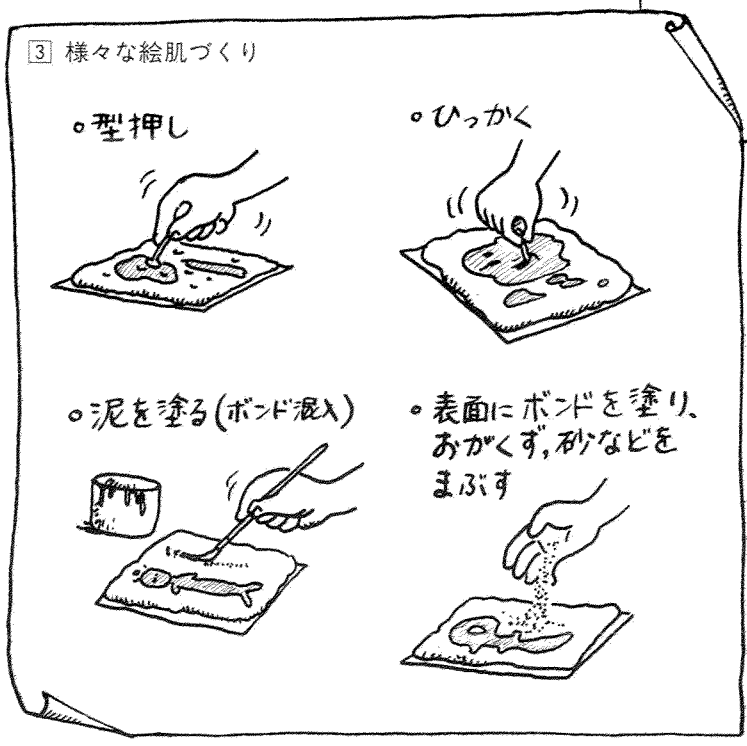
「なんのかたちかな？」（立体）―― アルプ

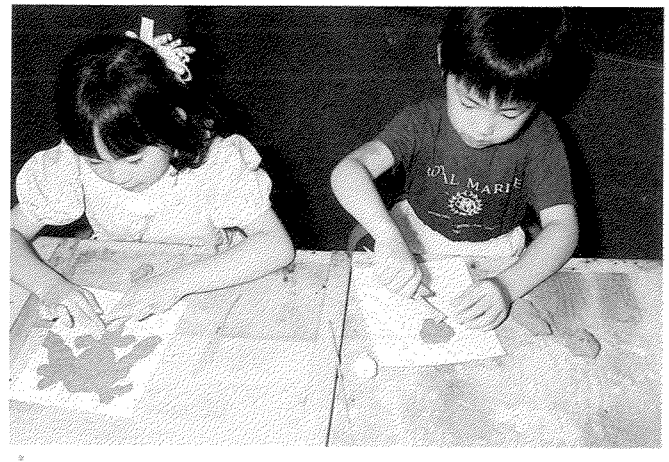
アルプは、日記の中で、「芸術は、お母さんから生まれる子どものように、植物から生まれるくだものように、人間から生まれるくだものである。」と書いています。アルプの作品をみていると、全くの抽象化された形というより、そこに生命の有機的な関連を見ることができます。子どもたちはアルプの作品から果たして人間そのものとの関係を見出すことができるでしょうか。この「なんのかたちかな？」は、アルプが着目していた果物をきっかけにしました。子どもに親しみのある具体的なくだものを、子どもたちなりに抽象化させてオブジェをつくることにしました。紙に好きな果物の絵を描き、それを丸めて粘土の中に入れる行為は、大人にとっては無意味なことといえるでしょう。しかし、子どもにとっては、その行為を通過することによって、果物の写実的な形を粘土の段階でとどめなくとも、意識の記憶の中では確かに果物であることを確認することができるのです。もし、できあがったものを見て、だれもがりんごやバナナのジュースの形と言わなくとも、果物の絵がたしかに入ったこの作品は、まぎれもなくくだものであるというこの確信は、秘密めいていて楽しいものです。アルプは詩人でもあったわけですが、言葉をポエムにしてしまうことの中に何かこれに似たものがあるような気がします。



「つちでえをかこう」── デュビュッフェ

ジャン・デュビュッフェは、小さな子どもたちが描くような形に興味を持った時期があります。「ミス・コレラ」や「栗色の髪の太った顔」の形は子どもたちが家族や友達を描いたものと本当によく似ています。1940年から50年ごろには漆喰、タール、砂などの建築材料を素材に用い、壁のような表面の作品を制作しています。素材のありのままの色をきわだたせ、形は細部にこだわらずおおらかなものです。ザラザラ、すべすべ、ゴワゴワといった触感的な言語で言い切れてしまうほどの単純なものではありません。絵の表面は、土の道が雨や晴れなどの天気によって、また人が歩いた跡、人や車輪の跡や動物の足跡によって様々に変化しているように見えます。今日の泥遊びも経験しにくい環境に住む子どもたちは、「汚れ」の感覚で土を捉えがちです。デュビュッフェの「ミス・コレラ」はそんな子どもたちに触覚で遊ぶ楽しさをもう一度呼び起こしてくれます。「ほら洋服が汚れるわよ」と言いがちなお母さんも、モダンアーティストの仕事なら、きっと喜んで子どもたちに土の感触を体験することをすすめてくれるに違いありません。土や砂というのは、生来人間と深いかかわりを持っているものなのですから。





「光のタワー」―― ドローネー

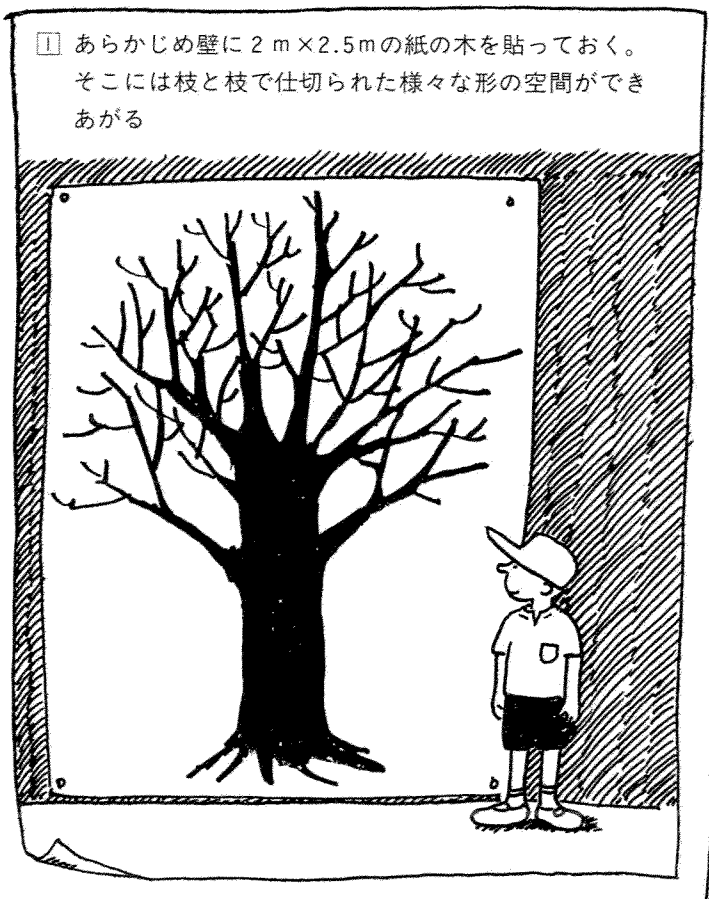
ドローネーの描いた「赤いエッフェル塔」は、強調された赤い塔がユーモラスにさえ感じます。この他に何枚かのタワーを描いていますが、どれもいくつかの視点からみているようです。エッフェル塔が建った当時は、多くの人々を驚かせました。その事件の中で、ドローネーが一番驚き、エッフェル塔を好きになった人かもしれません。現実のエッフェル塔の後ろにはビルはありませんが、ドローネーの絵には青いビルのようなものが表れています。それは、光の反射によって、建物も塔も混在して見えるように感じる、あの不思議な状況なのかもしれません。

子どもたちにとっても、非常に高い塔はあこがれです。そして、光るものへの神秘感は、誰もがもつ原初からのイメージです。それらが一緒になると、なぜかとても現代的な風を感じるのはなぜでしょう。赤い紙を切り取って作ったタワーは、子どもの年齢とはさみの使いこなしの技量で様々な形のものになります。しかし、どれもがれっきとした塔であるのは、子どもそれぞれの塔に対する意識が反映しているのです。光にかざす前の塔は背景である周辺の風景と近い距離にあるように感じます。

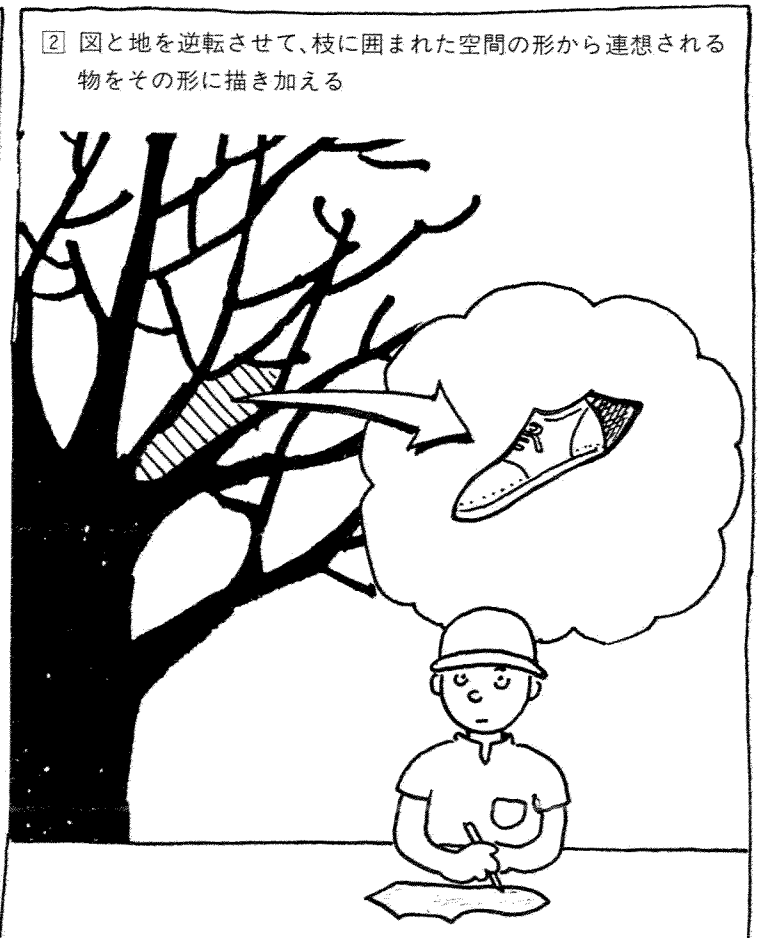
それが光をあてると空気が動き出したように感じられます。作ったものを光にかざすことによって、その様相が変わり、子どもたちは素直な驚きを示します。

「木の中のかくれんぼ」―― マグリット

マグリットは、多くの不思議な世界を描いています。それは、現実にある物をそのサイズやあるべき場所をまったく無視して、それらを組み合わせることによって、今までにない新鮮な感覚を見る者に呼び起こさせます。りんごのように柔らかいものを固い石のようなものに描き、質的変換をもなし遂げてしまいます。マグリットの絵を見ていると、私たちの〈目〉が、見ようとしてではなく、なにげなく見過ごしているように物を見ていることに気づかせられます。「大気の声」は、重そうな大きな鈴が悠々と大気を浮遊しているように見えます。ありえないことなのに、とても現実的な映像として目に映ります。それは肉眼で見えるもの以外の、つまり精神の目が見たように描いたからかもしれません。マグリットはきっと人を驚かせることが好きな人だったのでしょう。しかし、彼の場合はその驚きを現実と無意識と不可思議と夢の狭間で、心や気持ちの奥の部分までに響きわたらせてしまっています。　この「木の中のかくれんぼ」は、葉っぱが散った後の、どこにでもある木をみていると誰もみえないはずなのですが、誰もがそれぞれに見えてくる不思議な空間を見つける遊びです。偶然にある形を見ていると、自分だけに見えてきて、それを形に描くと、誰もがそのように見えてくる。それは人間がもっている心の大切な働きによる証拠のような気がします。不思議に対する人間の想像的な創造行為です。



1 あらかじめ壁に２ｍ×2.5ｍの紙の木を貼っておく。そこには枝と枝で仕切られた様々な形の空間ができあがる



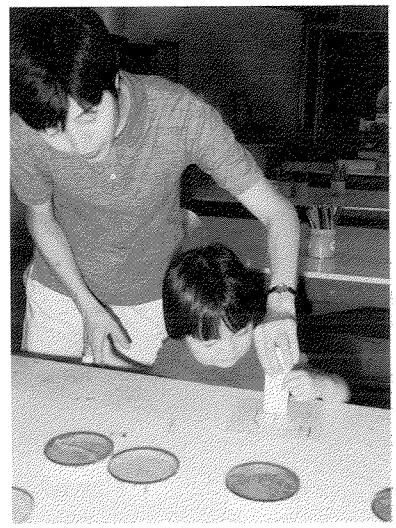
2 図と地を逆転させて、枝に囲まれた空間の形から連想される物をその形に描き加える

3 描き加えた絵を木の中にもどし、枝と枝の間を様々な作品で埋めていく

「たてたて・よこよこ」── モンドリアン

モンドリアンは、絵画表現において、具体物を抽象化する過程で、その要素を垂直と水平に極限していきました。「生姜壺のある風景II」は、その変化の瞬間を見るような気さえします。垂直と水平、青、赤、黄の三原色とその結果をみてしまうと、当然のなりゆきとさえ思えます。しかし、そこに至るまでに、モンドリアンは具体的な物をよく見、特に海や樹などの自然の物を観察し、目に見えない法則を感じ、心の目で探っていくという仕事をしてきました。物が抽象的な形に変化するということは、目に見えるものから、目に見えないものを自らで見つけだしていくことです。モンドリアンの場合、彼の作品群がそのプロセスそのものであるため、抽象化をたどるというまさに抽象的な事柄を具体的に子どもたちに見せることができます。

「たてたて・よこよこ」のプログラムは、厚紙という単純な道具を用いてスタンプとして押すだけで、ある形のデザインができてきます。それは、モンドリアンがクリスマス記号として厳格に示していったものから見れば、ほど遠いものです。しかし、ある約束事がありながら、位置も数も自由に描きこむことによって水平垂直の画面が表れ、画面に規則的な秩序と構成をもたらします。十の記号を無心に押している子どもの姿は、意識化しようとしていくうちに無意識になるアーティストの精神となんら変わりないように見えます。



「かおのぶんかい」―― ブラック＋ピカソ

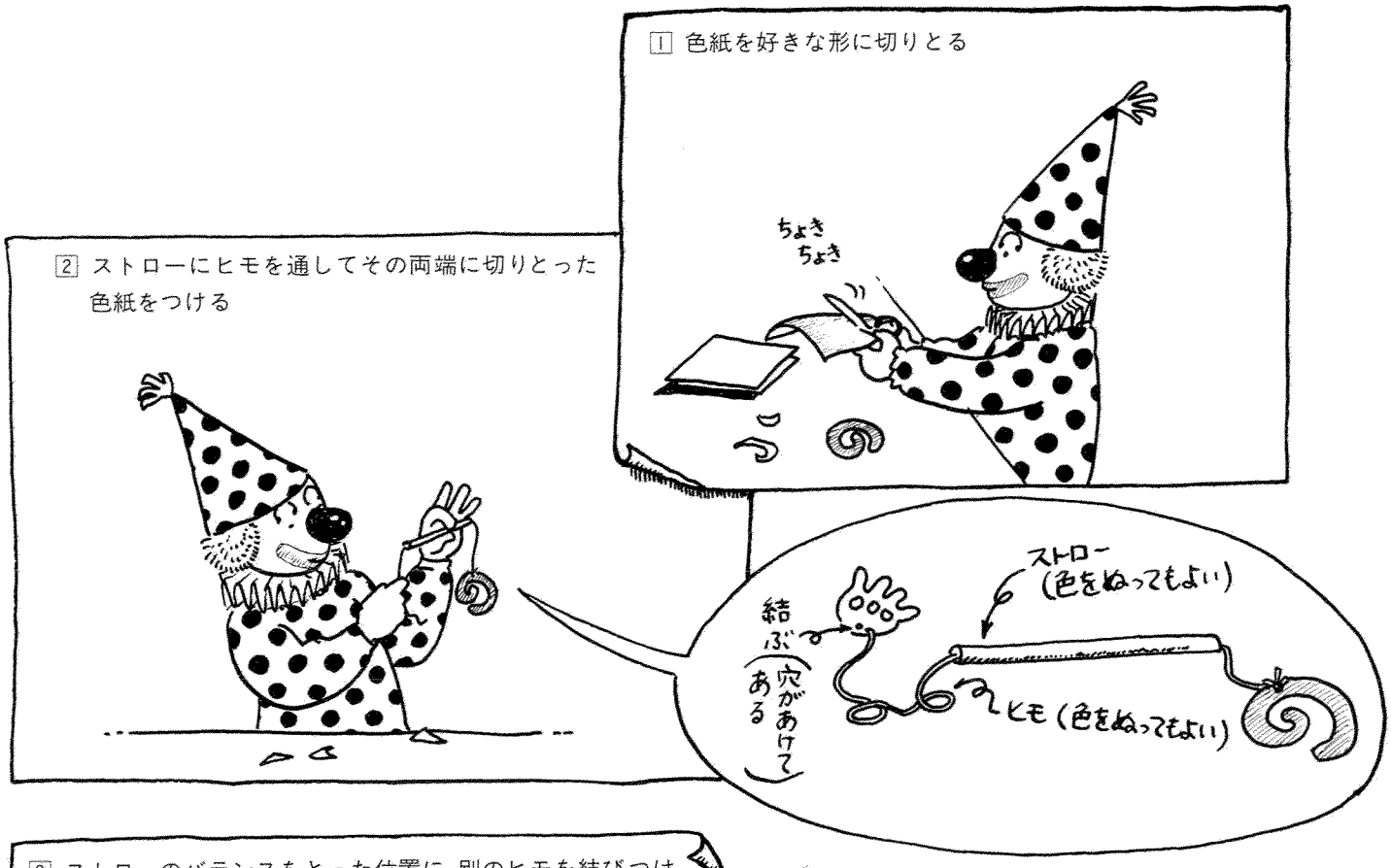
ブラックやピカソによる「キュビスム」はそれまでの物の見方を全く変えてしまうほどの美術史上の重大事でした。ピカソの「水差しと果物鉢」やブラックの「ピアノとマンドーラ」の絵をみていると、色彩は少数に限定され、それぞれの物は分断されています。細かい直線は何を意味し、物そのものはどのような役割をしているのかと考えさせられてしまいます。キュビスムは、物をある一つの視点から見て描いていた以前の絵画方法をやめ、新しい空間の描き方を追求したときに、物そのものが立体として多面からできており、物を描くために多視点から見たものを平面に置いてみようと試みた結果でした。科学的とも言えるそれらの考え方は、いろいろな作家に影響を与えました。しかし、科学になりきらず、あくまでも美術の中の分析的探求にとどまっているのは、作家個人によってその視点の選び方、分割の仕方が異なり、描く画面の意識が最後まで保たれていたからです。

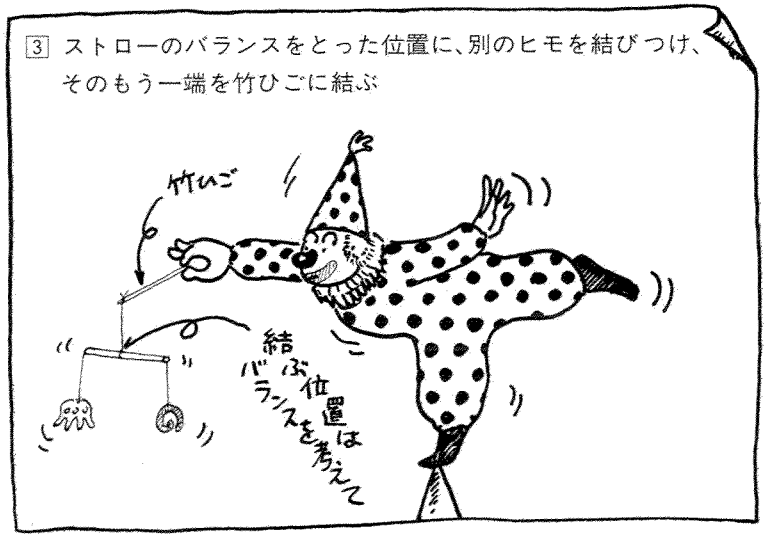
「かおのぶんかい」では、対象物を直線と曲線に分解します。最後に三枚を重ねるとあたらしい顔が生まれます。これは、キュビスムの概念にそったプログラムではなく、画面上に成立する線を描くのに、対象物からどこを選んでいくかという意識の過程なのです。ある物を見た時、子どもはどこに目をやり、何を真先に見ているのかがわかります。対象物の見方を段階別に追った一つの軌跡ともいえます。

「どっちもどっち」── カルダー

カルダーの作品からは、いつもユーモアを感じます。サーカスや動物が題材だったり、あるいは身の回りにある材料を使っていたりするからです。その中でも、もっとも気持ちをなごませてくれるものは、動くものです。モビールといいます。カルダーがモンドリアンのアトリエを訪れ、真白い部屋の中で三原色の長方形を時々動かしているのを見て、「ああいうのが動けばいいのになあ」と思った翌年から、モビールができたといいます。アーチストたちは、他の作家との作品と出会って刺激をうけるだけでなく、人間と出会うことで、新しい発見と創造のエネルギーを生み出すようです。

乳幼児が天井のガラガラに目をとめ、微笑みを浮かべて喜ぶように、子どもたちは動くものが大好きです。しかし、いざ作るとなると、幼い子どもたちにはなかなか作れません。「どっちもどっち」は5、6歳の小さい子どもたちもつくれるように、カルダーのモビールを簡素化してみました。モビールの中でもっとも難しいのは、バランスです。吊るすものが増えれば増えるほど、そのバランスのとりかたは困難になります。シーソのように、あるいはやじろべいのように、「どっちもどっち」のモビールは、最も単純に2つの方向へゆれ動きます。完成させて、子どもが竹ひごのもう一方の先をつまむ様子は、子ども自身もぶら下がったモビールの先端のようです。





「うごいてみえるかな？」――デュシャン

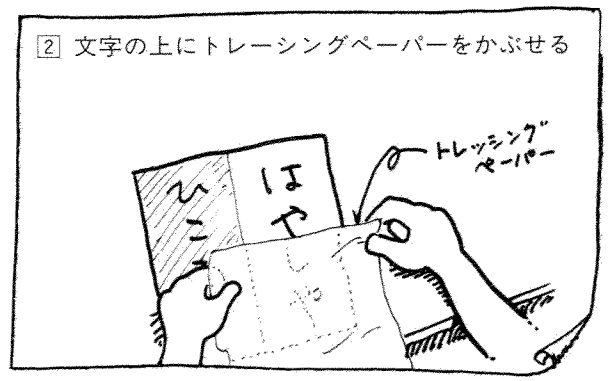
デュシャンの「階段をおりる女」や「汽車の中の悲しめる青年」は、キュビスムの影響をうけながら、さらに動きを画面に表そうとしたものです。ターナーの「雨、蒸気、スピード」やバッラの「綱でひかれた犬のダイナミズム」なども同様に、動きやエネルギーを表そうとした絵で、当時人々をたいへん驚かせました。デュシャンは、自らの表現を常に新たな方向へともっていく画家でした。それが結果的には、人々を驚かせるのです。トイレの便器を美術館の中に展示し、「泉」と名づけた時は、芸術をもう一度考え直そうという強い意志の表現でもあったのです。

「うごいてみえるかな？」では、子どもたちは動きの表現を試みました。子どもたちはすでにマンガの世界で足がたくさん描かれたのをみて、動きを表す方法を目にしています。それを、話の中の状況説明の手段にとどめるのではなく、一つの画面の中での〈動き〉そのものを感じさせる絵画的な表現を実際に試みるのです。子どもたちを取り巻く視覚環境は豊富で、動画の世界は、漫画をしのぐ勢いです。このプログラムにおける〈動き〉は切り取った原形が連続して紙の上に表れるおもしろさと繰り返しの単純な美しさを、作業をすすめる子どもたちが即座に目にすることができるのです。それは、常に受け手にならざるをえない子どもたちにとっては、積極的な発信者となれるものです。

「なまえのえ」―― ミロ

言葉にできない気持ちというものがあります。また、自分でも気づかないような心の奥底の働きがあります。ミロはそうした心の様子を、偶然にできあがる形や色の散らばりの中から、記号のようなものを取り出して、絵で表そうとした人です。「耕地」の絵の中では、いろいろな形や色をもった生き物や、建物が画面にあふれています。そのどれをとっても、本物そっくりというよりも、ミロの思うままに、形や色が変えられています。この絵の中に登場する不思議な形は、楽しい記号となって、私たちにことばにできない心の働きを、語りかけてくれます。

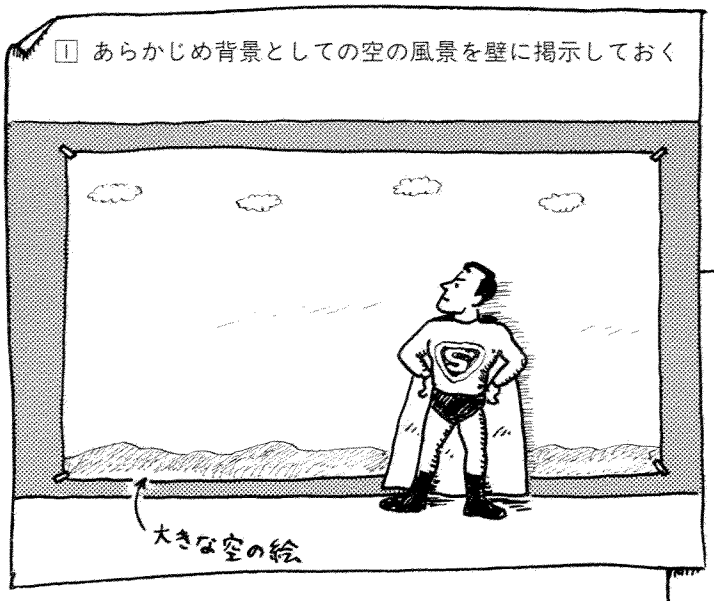
「なまえのえ」は、子どもたちがもっともはやい時期に書くようになる自分の名前をきっかけにしてみました。名前自体はすでに記号なのですが、それは、他のものに比較にならないほど、人間にとって最も重要な記号です。名前の確認は日頃しますが、その名前の文字の一つ一つの間を見ることなどありません。文字と文字の間には偶然にできた形があります。それは、見慣れた名前からは、想像もできないものです。そこでの発見は、通常気にもとめないものに目をとめることの新鮮さをめざめさせてくれます。ミロの記号が楽しい形や色にあふれていたように、名前の周囲には意味をもたないはずの記号が解読してほしいとばかりに並んでいます。

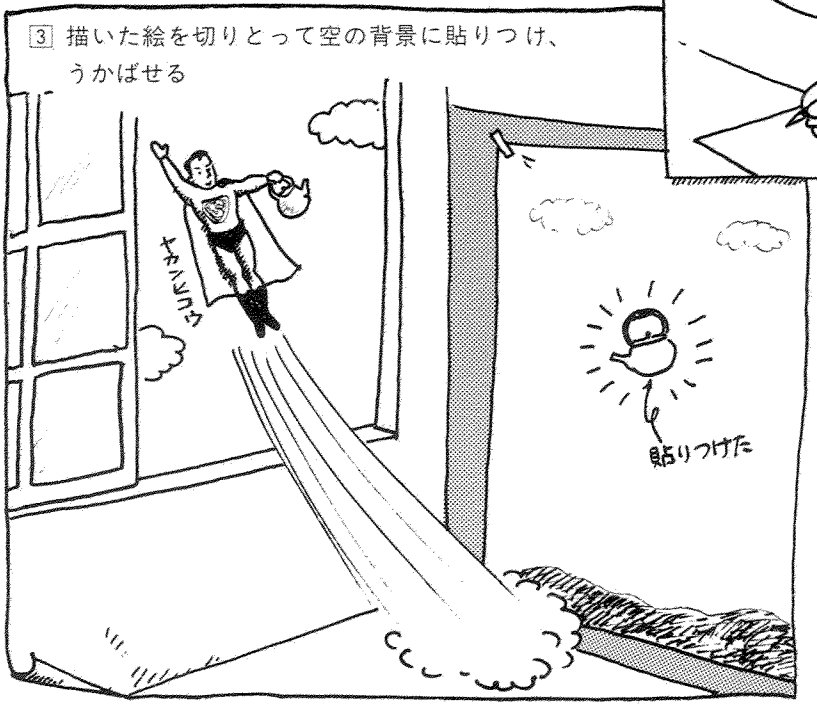


「そらにうかぶ」――マグリット

マグリットの絵を見ていると、私たちがふだん「あたりまえ」だと思っていたことが、どんどんひっくり返されて、夢の世界にひきこまれるようです。「大気の声」も、自然の風景の中に、三つの重そうな球が空中に浮かんでいて、ドキッとさせられるような不思議な絵です。この不思議な夢の世界について、マグリットは「眠らせるための夢ではなく、めざめさせるための夢」だといっています。「あたりまえ」を飛び越えた不思議な世界が、私たちの心の中に隠れていた新しい見方をめざめさせてくれるのです。

「そらにうかぶ」は、子どもたちがあらかじめ設定された空に、浮かびそうもない物を描いてつけていきます。今では、子どもたちの身の回りに、ビデオやコンピューターが、様々な光景を写しだし驚きも少しずつ緩慢になってきています。しかし、大きな空の画面に、浮かびそうもない物は何かと考えることが、実はとてもおもしろい事だったと気づきはじめるのです。浮かぶことなどありえない自転車や家、あるいは、オムレツやおむすびなど、子どもたちがそれぞれに思い浮かべる物が空に並びはじめると、それ自体が奇妙な組み合わせとなって、心はいつのまにか不思議な夢の世界へと引き込まれているのです。





「手の中のわたし」── レジェ

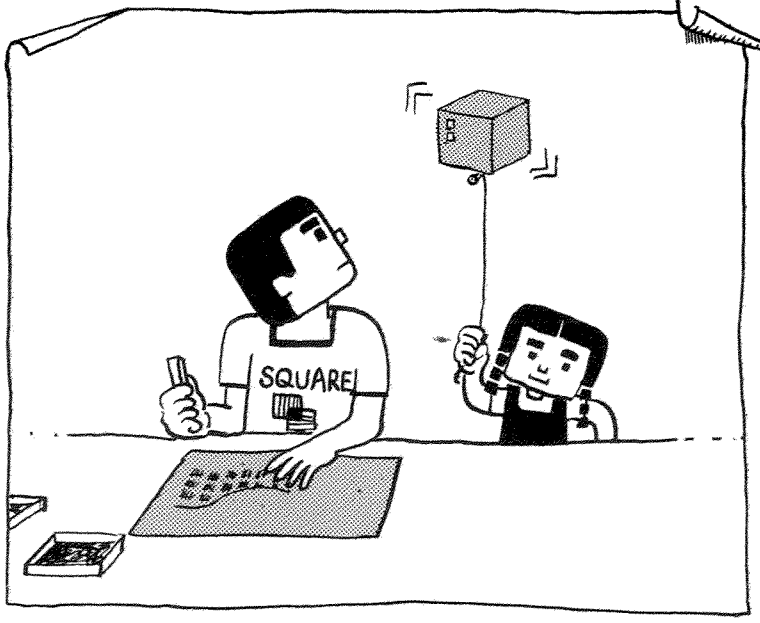
レジェの描いた「花瓶をもつ女」は、形がとてもがっしりとしています。服装と胸の形がもし違っていたら、女の人とはわからないほど、たくましく見えます。体の輪郭は、似通った曲線で描かれ、手にもっている花瓶の直線が、よりいっそう体のたくましさを強調しているようです。手の指は４本とも同じように単純な形で、顔も左右対象に描かれ、表情はありません。この絵では、色と形がしっかりと結びつき、計算通りの仕上がりになっているように見えます。立体感を出すために描かれた黒いぼかしは、後の絵では、形をあらわす力強い太い線に変化していき、色は形からはなれていきます。

「手の中のわたし」では、形態から色彩をまったく遊離させ、画面は線と線が交わったり、線と色が、あるいは、色と色が重なり、思いがけない空間を作っています。子どもたちが自分の手を紙の上においてなぞることによって、その前に描いた顔の絵の空間がくずれます。さらに、絵具をのせることで、まったくちがった空間が、線を襲います。子どもが絵具をのせることに夢中になり、線の要素をすっかり忘れてしまっても、はじきだされた黒い線が、色の海に浮かびます。子どもたちが制作しているのを見ていると、レジェがキュビスムと写実の統合と言われる所以は、色をキュビスム的に、形を写実的にし、それらを同じ画面に結びつけたからだろうか、と思えてきます。

「しかくがいっぱい」── クレー

画家であり、音楽家でもあったクレーの絵からは、いつも音楽が聞こえてきます。「新しい調和」の絵の中でも、クレーは音楽を奏でています。一見無秩序にならんでいるように見える四角に目をとめ、しばらくその上で散歩をしていると、みえてくるものがあります。反転シンメトリーになった四角たちです。それを発見した後で、絵を再び見ていくと、目の動きが同じ色と色を結び、その後で似た色に目をやるというように、どんどん四角の色に引き込まれていくのです。それは視点の移動によって、視線が描く形が実は四角が呼ぶ音の絵なのではないかと思わせるほどです。クレーはこの他に筆のタッチで色面をつくり、色がハーモニーになったような作品を制作しています。さらに、色彩に音と詩をたくし、調和と秩序の中に、色の持つ神秘の輪を広げていきます。

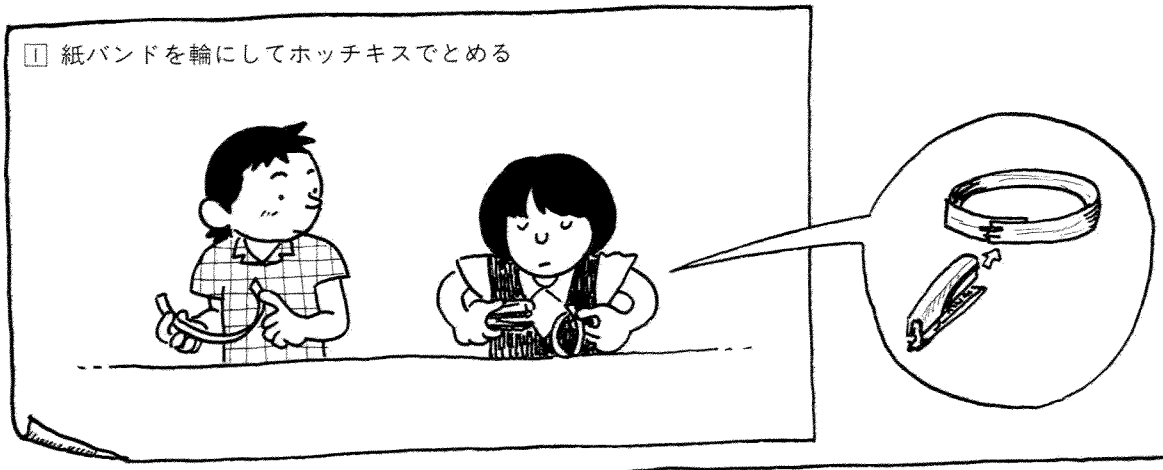
子どもたちは、筆をもった場合、あまりの自由さに、色よりも線を優先させてしまいがちです。「しかくがいっぱい」では、小さな四角の木切れを使って、絵や模様を描きます。黒い紙の上で、絵具の色は、四角の面を浮かび上がらせ、色自体の存在を強く訴えかけ、時には押し加減によって強弱がつき、変化に富んだハーモニーが生まれてきます。そこでは、子どもたちは色の変化を楽しむ名人になっています。クレーが子どもの絵に興味をもち、実際に彼の絵が子どもの絵に似ていたのは、彼自身、子どもが見る世界を自分も見たいと思っていたからではないでしょうか。

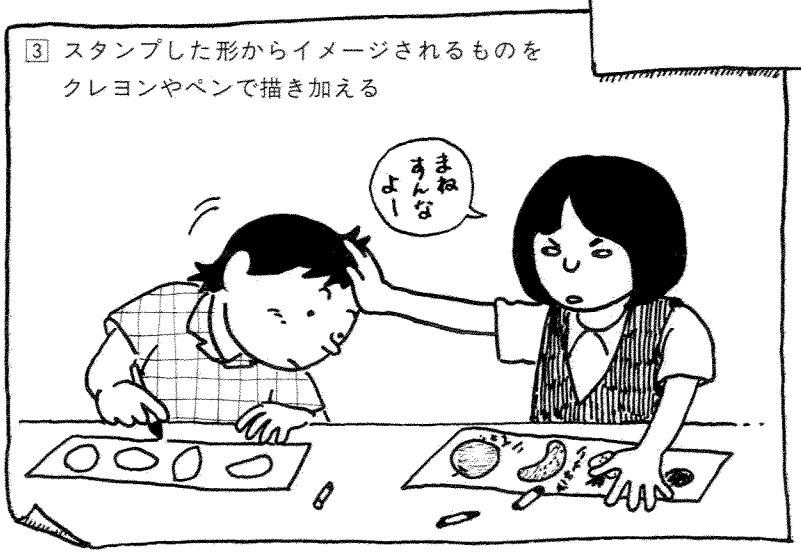


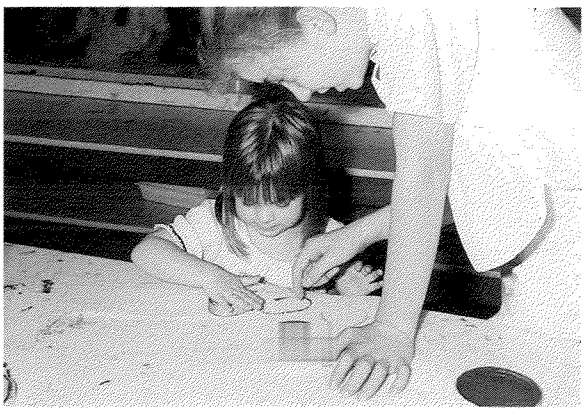
「なんにみえるかな？」（平面）―― アルプ

アルプの「５つの白い形体と２つの黒い形体のある星座、ヴァリエーションIII」は、白い雲が浮かんでいるように見えたり、黒いものは空豆に見えたり、形があまりに単純化されているので、子どもが存在自体を示す時に描く丸の仲間のようにも思えます。曲線によって作られたそれらの形は、具体物の輪郭ではないのに、なぜか有機的な表情を伝えています。曲線にかこまれた形が自在に動いて、位置をかえたとしても、画面には、何の不調和ももたらさないほどに、それぞれの形が自然です。

「なんにみえるかな？」で、子どもたちは、紙バンドを輪にして指の圧力によって、様々な楕円や不定形を作り、スタンプにして長い紙に押していきます。それは、単純な行為ですが、同じ物から様々な形が無数に生まれたことは、驚くべきことです。子どもたちはいとも簡単に生まれてくるそれらの形に、果物の名前をつけていきます。青い線で囲まれた抽象形体は、またたく間に、子どもたちの手によって彩られ、いろいろな果物に変身していきます。連想する具体的なものを描き加える子どもたちの能力は、見立て遊びが上手だからこそ、大人顔負けの想像力を発揮するのです。アルプが生き生きと自由な形体の彫刻を生み出していったのは、子どもの自由な見立て遊びと類似した柔軟性をもっていたように思えてなりません。



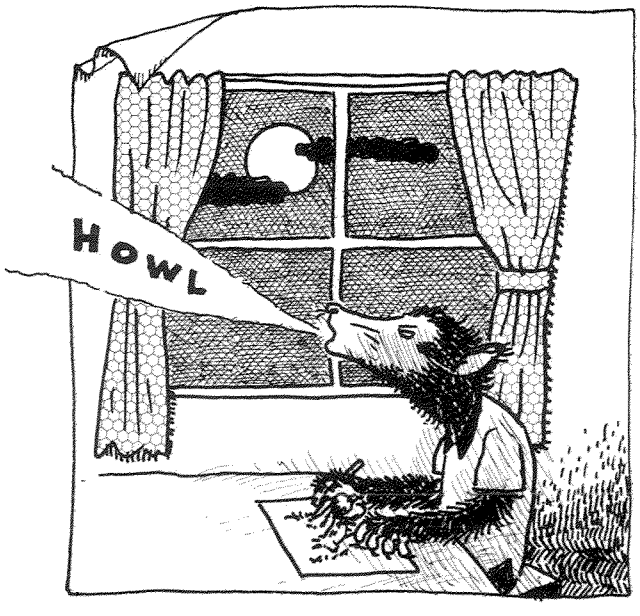


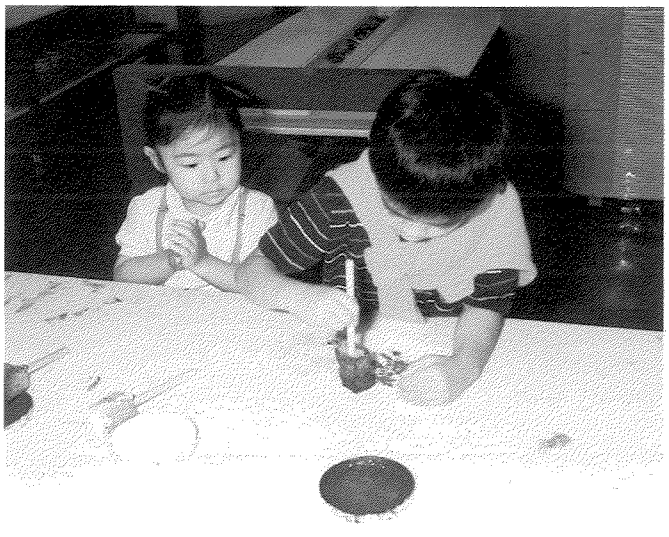


「動物になったわたし」―― シャガール

シャガールの「窓から見たパリ」の絵には、いくつかの不思議な物が描かれています。人間の顔をした猫、二つ顔をもつ人、さかさまに走る汽車、三角形をもちながら空から降りてくる人など、さまざまです。それは「なぜだろう」という不思議さではなく、夢をみているような空気にふれた不思議さです。人面猫の絵といえば、ユーモラスな情景を想像しがちですが、シャガールの絵の中の不思議なものたちは、遠くの方にいるものであったり、時間を越えた所での出来事であるかのような感じをあたえます。シャガールの絵は、少年期の記憶や体験、そして祖国ロシアでの思い出から描かれているといわれるのもうなずけます。

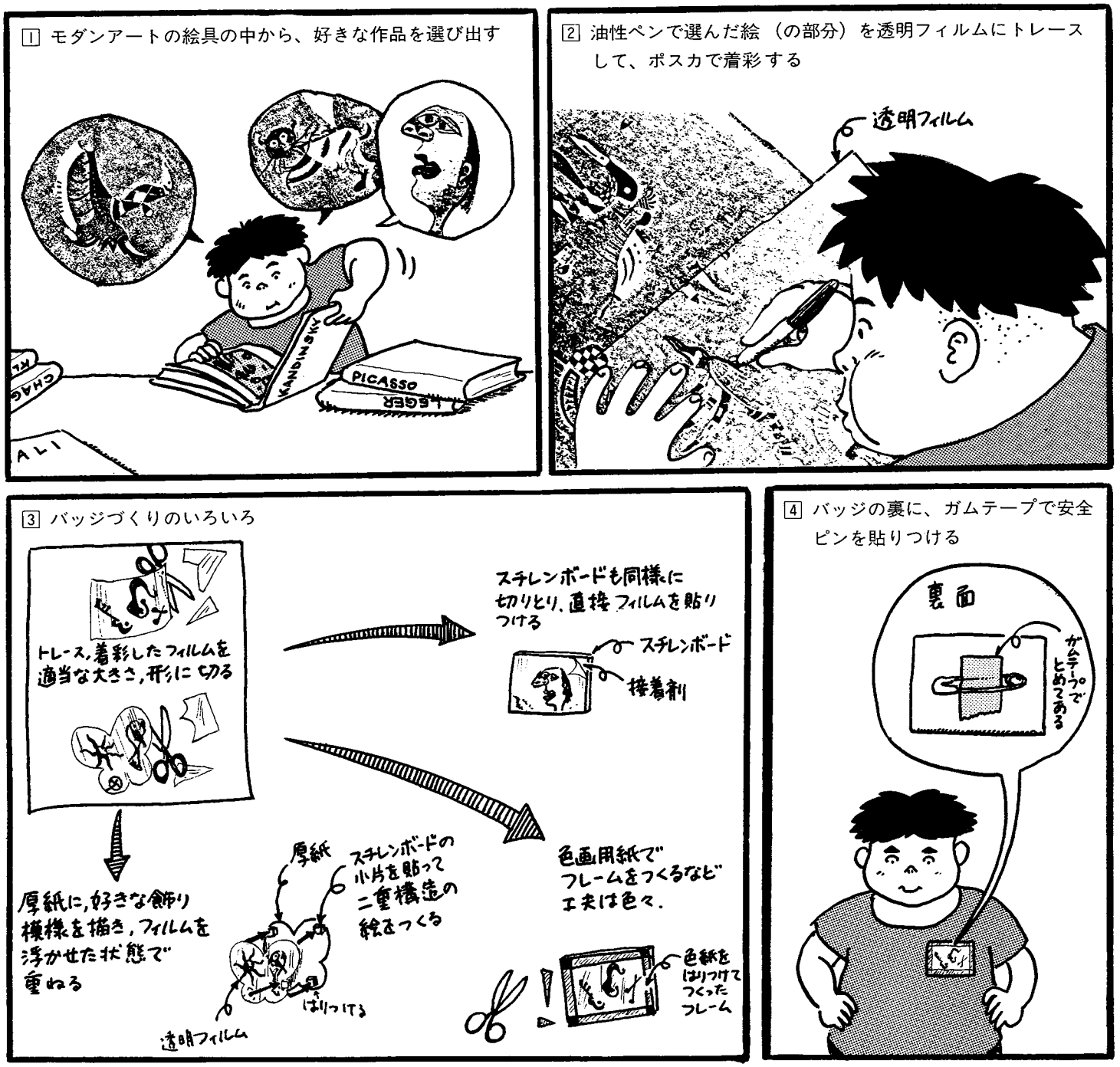
「動物になったわたし」は、子どもたちが親しみやすい動物に「もしなれるとしたら、なんになりたいかな？」という問いかけによって、制作が始まります。シャガールの絵が夢や幻想の世界を暗示しているように見えるのに対して、シャガール自身は、心理的考察から絵を構成するといった、客観的な意見を一方でもっています。大人からみると、子どもの絵の表現そのものは夢のような雰囲気を与えているとしても、描く子どもの心は、シャガールのように、現実に反応した心理的表現なのかもしれません。





造形実験室１

［もしゃもしゃバッジ］

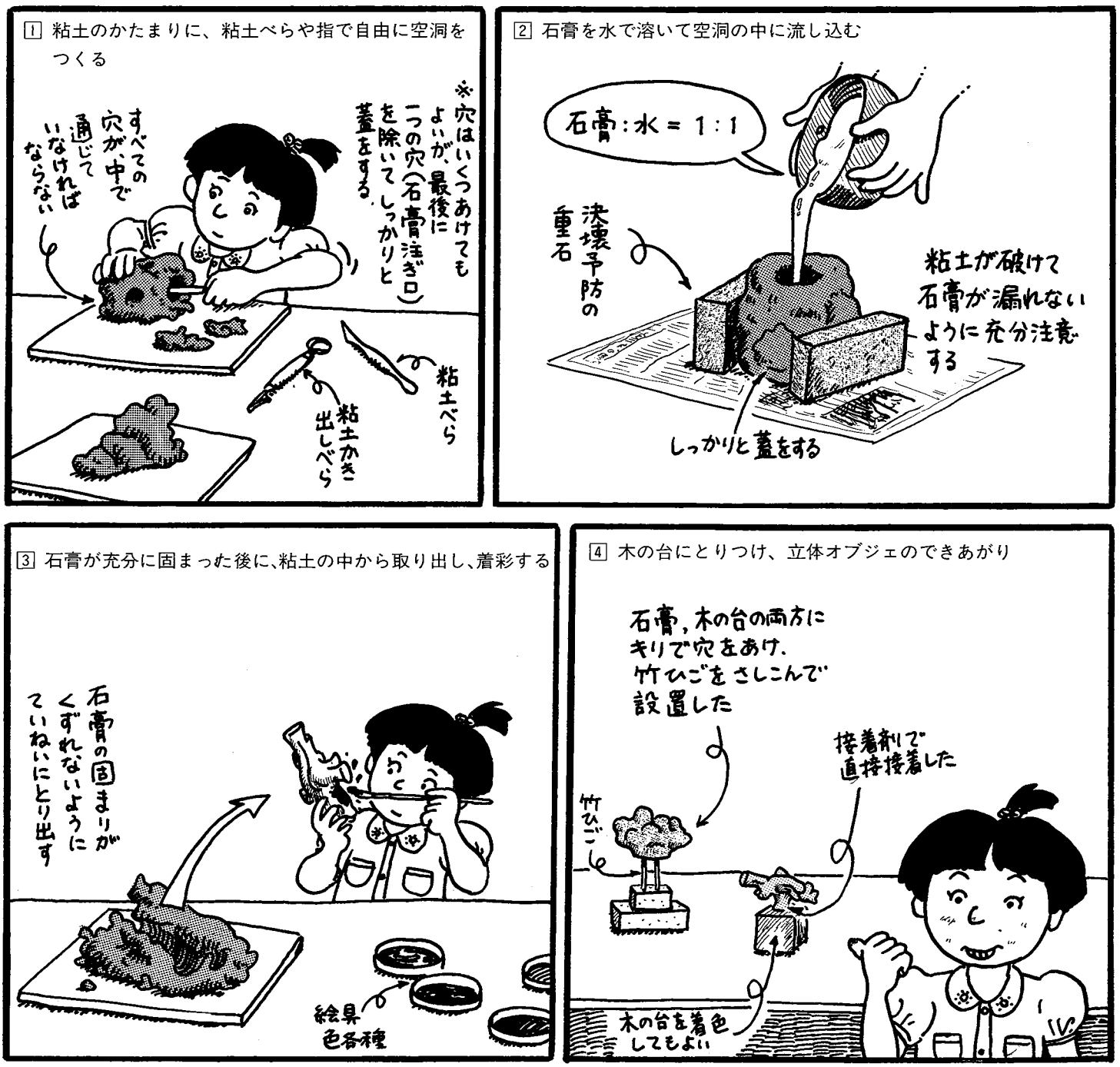


「もしゃもしゃバッジ」とは、模写してバッジを作るプログラムです。模写することは自然に形の細部まで見ることになります。しかし、作品をそのままそっくり写そうとすることは、並大抵のことではありません。一方、模写する対象にもよります。カンディンスキーは自ら有機的な形を作り出し、意味をもたせています。彼の描いた「さまざまな動き」は、ひとつひとつの形がそれぞれに空間の中で浮遊しているように見えます。アメーバーのようだったり、或いは深海の微生物のようでもあります。そのような画面から好みの形を見つけだすのは興味深いものです。作品からある部分を選択し、写し出し、再構成するという行為が、バッジを作るという過程に集約されています。形や色が、子どもたちの心に直接響く時、試行錯誤も楽しい作業になります。ミロ、クレー、ピカソも人気者です。

「もしゃもしゃバッジ」は、作品とかかわった証となる、おもしろいバッジです。

造形実験室 2

[土の中のかたち]

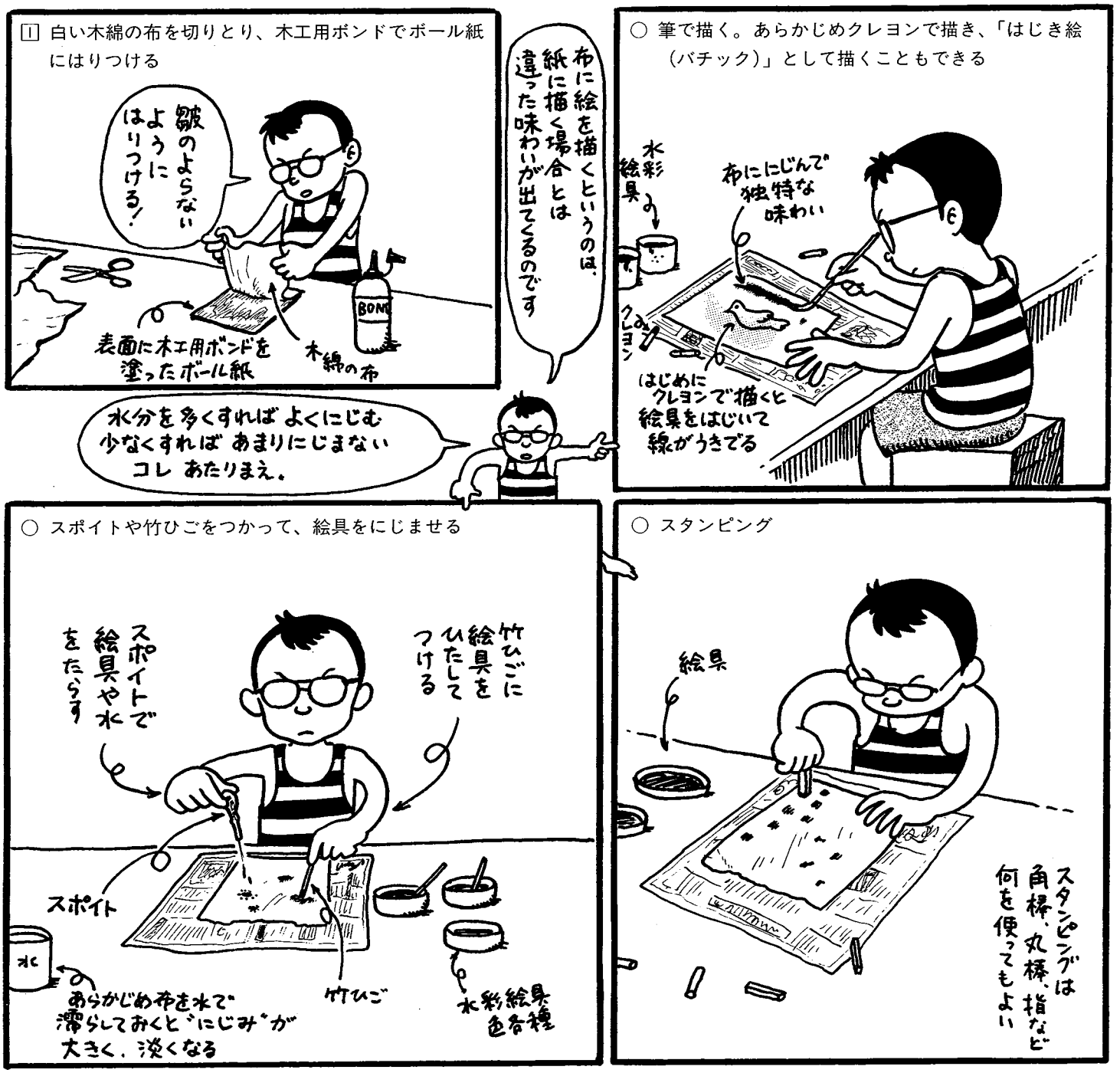


20世紀初頭の彫刻は、写実的に対象を表現していた以前のものから一転して、アーティスト個人の意識によって、様々な表現方法が創造されたといえます。飛ぶという人間古来の夢を常に作品にたくしているブランクーシ、人間形成を不定形の有機的表現にするアルプ、真実を求めて精神的な作業を繰り返すジャコメッティなど、その思いは、作品それぞれに、作家の特徴となって表れ、感じることができます。

子どもたちに抽象彫刻を言葉で話そうとすると、説明的にならざるをえません。それよりも、作業の過程から、形の創造を体験することがより自然です。「土の中のかたち」は彫刻家たちが意図的に作品に手と目を働かせたのとは異なり、偶然にできる形の抽象的なおもしろさを目的にしたものです。偶然できた自分の＜形＞から何かを読み取ろうとする作業には、抽象彫刻から何かを見てとることへの道がつながっているように思われます。

造形実験室 3

[布に絵をかく]

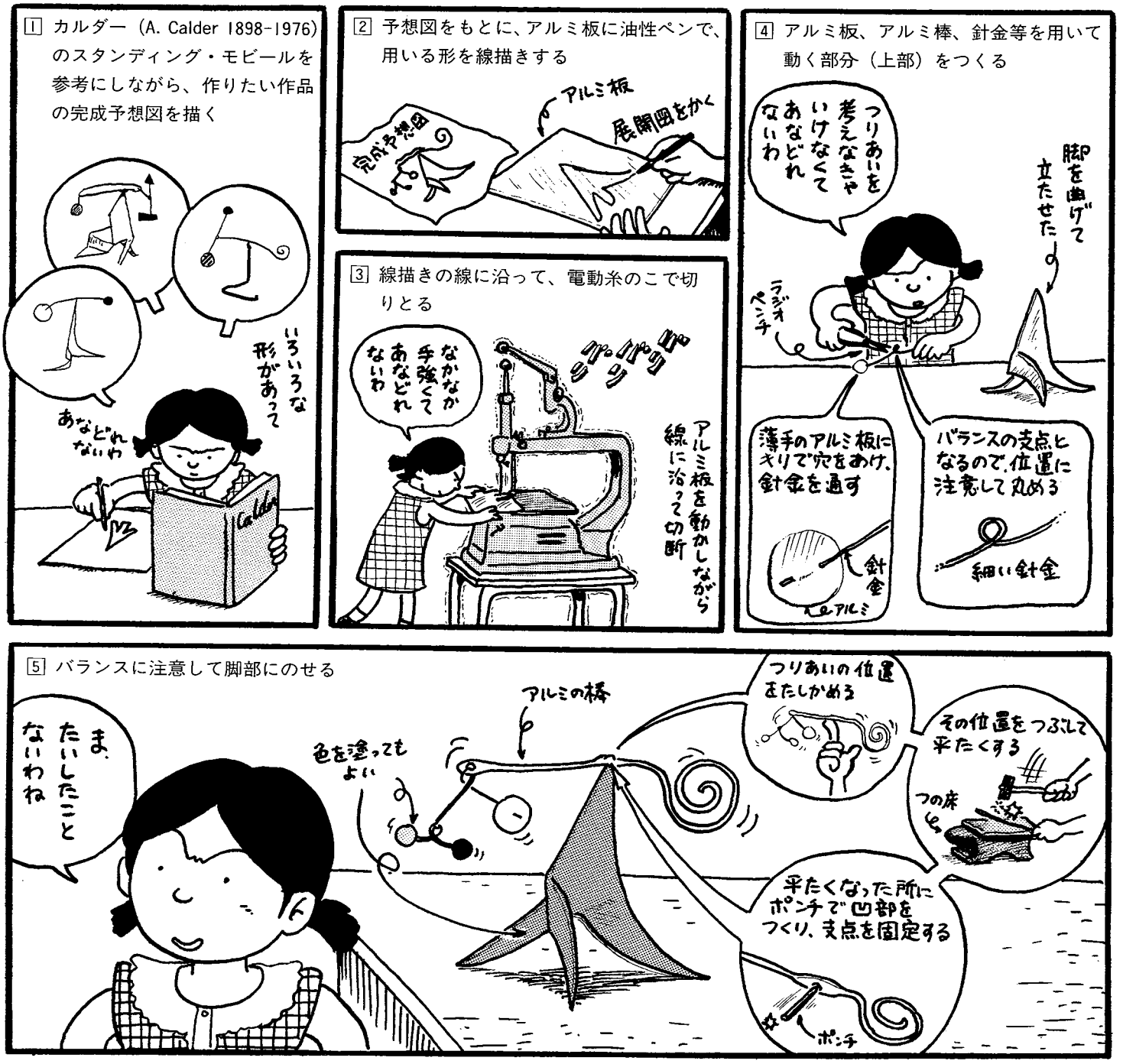


クレーは色彩の画家、あるいは、色調で絵に音を与える画家とも言われています。クレーの作品を見ていますと、色はキャンバスの目との絡みによって、よりいっそう色の音階が豊かになっているように思えます。麻布にテンペラなどの下地をつくり、微妙な色合いをかなでます。色と形に質感を与えているのが、＜布＞の素材性です。

「布に絵をかく」では、子どもたちは厚紙に布を貼り、支持体を自分で作ります。絵具やクレヨンで絵をかくのに慣れている子どもたちですが、布に描くことはあまりないようです。染織のように染める感じでもありません。布と紙の相違は、にじみとかすれ、そして絵具の吸い込み具合によって、同じ画面の中でも、濃淡が生じることです。それは、布が植物で作られる人間の手を通した原初的材料であったことからくる暖かさであり、それによっていっそう色自身に思いを込めることができるのです。

造形実験室 4

[スタンディング・モビール]



カルダーのモビールには、いくつか種類があります。天井から吊るすもの、壁にかけるもの、そして床におくスタンディング・モビールです。他のものにくらべると、スタンディング・モビールは、立つという意味から、人であったり、動物であったり、あるいは宇宙人のイメージをもっています。金属の素材からなるモビールは、揺れる時に近代的な重さを感じさせます。子どもたちにとっても、金属は冷たく抵抗感を伴う手応えのある素材です。一枚のアルミ板を立たせるために、形に多少の制約があり、それを知ることで、立体の基本的な成り立ちを経験することができます。モビールの手の部分が、丸や三角や四角などの幾何学形体で構成されます。それは、金属を切ることの難しさと子どもが本体の形とのバランスを無意識に感じて制作しているからです。小型のスタンディング・モビールはゆらゆらと揺れるというよりも、クスクスと笑っているようです。

造形実験室 5

[アニマル・アート]

マルクは動物を主題に多くの絵を描いています。牛、豚、馬や鹿、狼、狐、虎など野性の動物も多くあります。しかし、それらは、自然な形としての動物を描こうとするよりも色彩による探求を深めるためのものでした。「黄色い牝牛」は、勢いのよい簡潔なフォルムと、明快な色彩によって、力強さを感じさせます。牛と後ろの風景は、色の組み合わせによって、画面全体の調和をとっているように見えます。

「アニマル・アート」では、マルクが色彩を駆使して平面におさめていった対象物を再び子どもたちが立体によみがえらせようとするものです。背景からぬけでた動物たちは、アラベスク風のカラフルな台座に立てられます。動物が背景の中でどんな位置にあるのか。それは構図上の位置というより、精神的な表情が色と形になっていることが、立体的切り取りの過程で感じられてくるのです。

造形教室　アートボックス

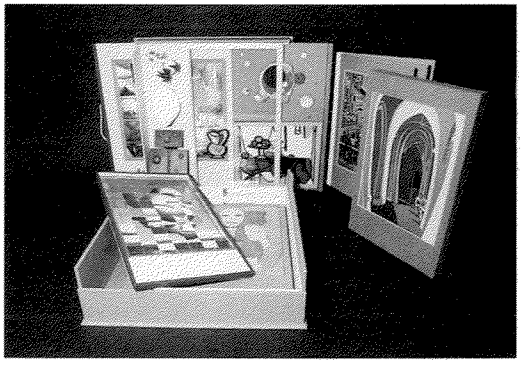
モダンアーティストの作品を見ていると、画面から確認されるものは色や形、あるいは今までに出会ったことのない記号の群れです。それは、20世紀初頭に入って、画家や彫刻家が自分の考えや感じたことを、従来の描画方法によるものではなく、独自のやり方で表してきたからです。目に見えたままに、あるいは心が見たいように見たものであり、視覚の開放といえるでしょう。したがって、それらを「見る」ということは、自らの視覚的直観によって、作品を捉えることが、より率直に鑑賞の門を開くことになります。

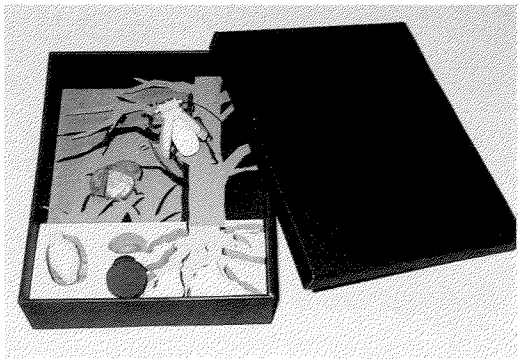
マルセル・デュシャンは語録の中で語っています。『創造的行為は芸術家だけによって演ぜられるのではなく、鑑賞者はその内的な質を見わけ解釈することによって、外部の世界との触れ合いを作品にもたらそうすることで、創造的な行為に参加するのである。』

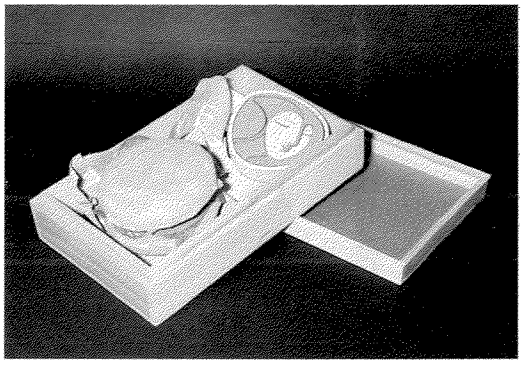
子どもたちは、たくさんのモダンアートの中から、興味を持ったものを見別し、解釈し、外部の世界と接触させるために、つまり、創造的鑑賞のために、コンパクトにそれらを《箱》に詰め込みます。

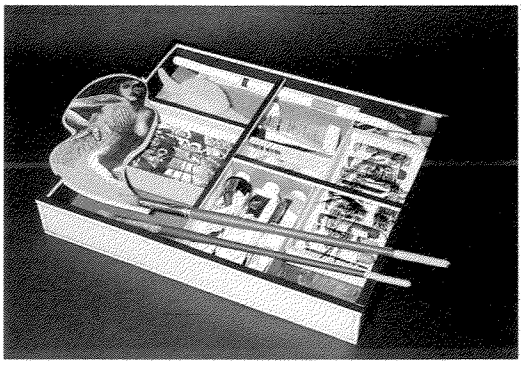
「アートボックス」は、モダンアーティストの作品から発想したものをさまざまに駆使して一つの箱につめこんでしまい、作品に対する子どもなりのアプローチと解釈を行おうとするものです。手順を追った作り方はありません。なぜなら、子どもの発想により、その箱はいろいろな意味を持つようになるからです。

子どもたちは、機知に富んだ話や遊びが好きです。それらに出会うために、彼らは想像力を惜しみなく使います。作品を分けてみたり、くっつけてみたり、具体的に場面を設定してみたり、まさに試行錯誤の実践です。そして目的は、おもしろいものをひとつの箱に詰め込むこと。昆虫採集箱だったり、お弁当箱だったり、絵具箱だったり、あるいは、役に立たない機械のおもちゃ箱だったりします。それらの中で、モダンアート作品の部分たちは役割を与えられ作家の個人的な意志とは裏腹に、子どもたちの意図を反映します。例えば、マグリットの不思議さは、一見するだけで充分に子どもたちの好む奇妙さを備えています。それをもとに、一コマ移動パズルを作ってみます。不思議が元の不思議に帰るまで、マグリットの破片は2 cmずつ着実に移動するコマになります。レジェの中の人達は、絵から抜け出し、ドローネーの入口の前で、たじろいでいます。ミロのにわとりはデュシャンの「泉」の上で朝の始まりを告げようとでもするかのように、威勢よく胸をはっています。箱に収められたものは、ひとたび、ふたを開けられると、はじめて出会う作品としては、慣れ慣れしそうな様相を見せてはいますが、実に奇妙な光景です。これこそ、シュルレアリストたちが目指した、無意識の内に結合と分解と、異種の連立、共存した世界に見えはしないでしょうか。

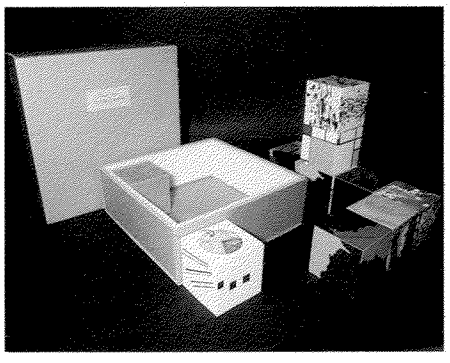








対象：小学校4年生以上
制作日数：3日間



造形教室「キュービック・さいころ・アート」

20世紀の初頭には、いろいろな作風が生まれました。水平と垂直の直線と三原色だけの絵や、絵具をポトポトとたらして描いた作品や丸・三角・四角などの形から作られた絵など、画家は考えたり、思ったりしたことをどんどん描いていきました。

「キュービック・さいころ・アート」は、子どもたちの鑑賞体験を占うさいころです。子どもたちの目は、どの作品をとらえ、どの部分にシャッターを切るのでしょうか。モダンアーティストの作風はさまざまです。大人の目には画家それぞれの特徴の差を明白に見てとれます。しかし、子どもたちのとらえる点、線、面の範囲は、全体像の中では、レンズのサイズが小さいかもしれません。ただ漫然と見てしまう作品たちを、その漂流の海から浮き上がらせる一つの手立てがあります。それは、10cm × 10cmの正方形の枠組によって切り取られる厳格な制限を与えてみることです。目の焦点は否応なく定められ、カメラのファインダーを覗く時のように、作品を直視し視点を移動し、探り始めます。

10cmの正方形は、絵を描くには少し不満を抱かせます。しかし、正方形6面の立方体になると、洗練されたその形から、手を加えてみようという気にさせます。さいころとしてのイメージが強いものです。しかし、転がすには少し大き目のその立方体は、キュビズムのキューブになぞらえてもいます。10cmの立方体は一面一面に主張がある一方、それぞれの面の間は協調することもできる大きさのものです。平面の表現を立体の面に埋め込みながらできてくるモダンアートのキューブは、まさに、子どもたちの目によるカメラショットの創造物です。

たとえば、8人の作家の組み合わせを考えてみますと、モンドアン、マレーヴィッチ、デュシャン、マチス、ポロック、エルンスト、クレー、マグリットの作家たちの作品は、特に並列した時に、確認しやすい特徴をもっています。それらの違いを子どもたちがどう見るかは、子どもの描き方に表れてくるでしょう。子どもたちはきっかけをもつと、作業の手は早くなり、集中する度合いも深まります。8人の作家の特徴を描いた立方体8個を制作した後、いよいよ子ども自身の独自の表現を試みます。9個のさいころが完成して、さあ、9人の現代アーティストが並びました。それら9個の立方体を1セットにします。「立方体の美術館」は毎日の気分次第で、縦に並べたり横に並べたり、あるいは、今日はモンドリアンの日と決めてみるなど、その展示方法は自由自在です。巡回展示も引き受けられます。9個の立方体は、子どもたちの成長とともに、その収蔵数を増やしていくかもしれません。

対象：小学校4年生以上
制作日数：3日間

造形教室　ポータブル鑑賞ボード

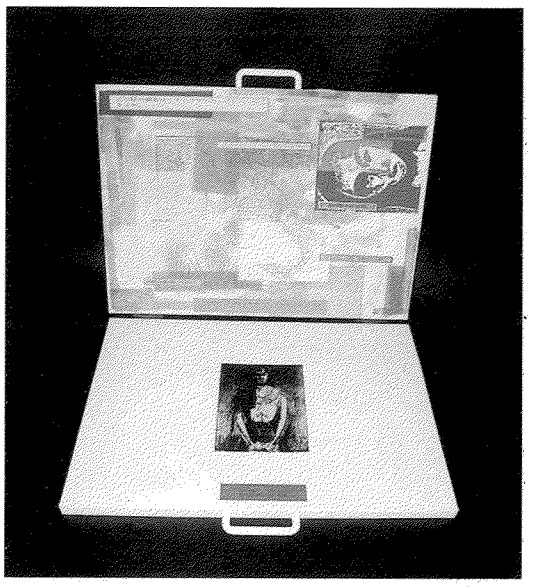
絵や彫刻を見ていると、気に入るものや気に入らないもの、あるいは、なんとなく気にかかるものなどがあります。しばらく見ていると、はじめて見た時とは違った感じがするものがあります。そして、その絵や彫刻を作った人について知ると、またさらに違った見方が心に浮かんでくることがあります。鑑賞とは、素朴な疑問や発見から始まり、それをどれだけ多くまた長く心にたたみ、時折ひらいてみながら、その過程での変化を自らで楽しむことができるかにあるような気がします。

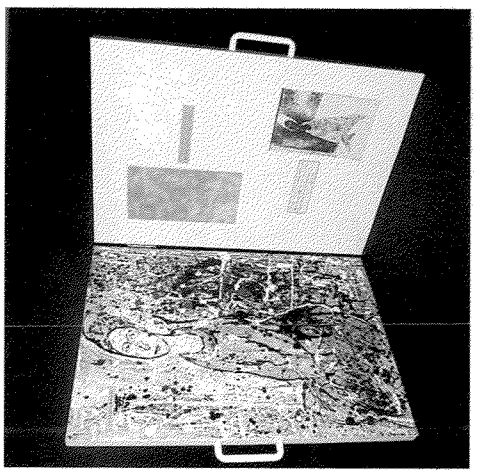
モダンアートを見ている時のそんな心の変化を、紙の上にとどめてみたくなりました。子どもたち自身からは、そのように見た感じをとどめるといった考えは生まれないでしょう。見た感じを言語化することの難しさは、大人の方がよく知っています。しかし、たとえ、1点あるいは2点の作品であったとしても、子どもたちだからこそ自分の思いを、鑑賞記録として素直に言葉と記号と絵に表すことができるのです。

一枚の気にかかる絵が、なぜ、気にかかるかを解き明かそうとしたものが「鑑賞ボード」です。それに把手をつけ、持ち運び可能にし、いつでもどこでも自分の鑑賞体験を“モダンアートこんなもんだ!”と見せることができる「ポータブル鑑賞ボード」です。

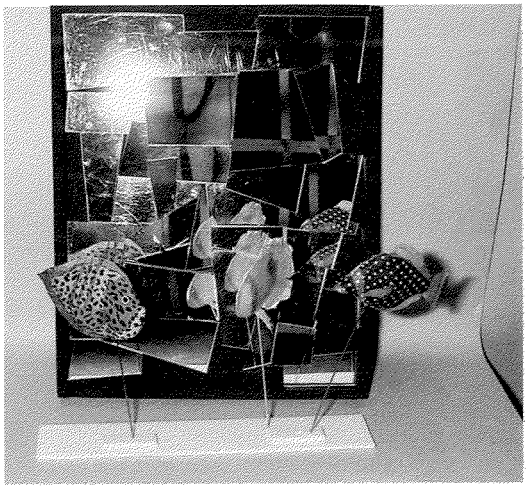
まず、B2パネル2枚に水貼りすることから始めます。水貼りは慎重をきします。子どもが紙を刷毛でしめらし、タオルで伸ばしてパネルに密着させ、端を水張用テープで止める時の様子は、真剣そのものです。一枚の水貼りしたパネルは、子ども自らが興味をもち、選んだ絵を確認するかのように、シルクスクリーンで好みの色に転写します。もう一枚のパネルには、作品に対する子ども自身の素直な気持ちを綴ります。子どもが絵を見て、即座にでてきた言葉を書きとめ、それをパネルに手書きをしたり、あるいは文字そのものを飾りながら画面を埋めていきます。それは、子どもの思いが深くともあるいは風のようにさらりと流れるものであっても問題はありません。そこからが始まりなのですから。

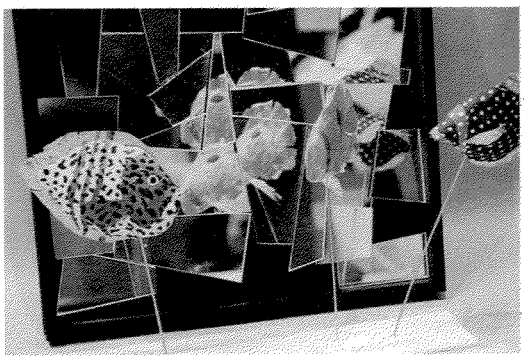
絵に魅かれた子どもの心の表情というものは新しい友達に対するものに似ているかもしれません。子どもはどんな初対面の場合でも、殆どの場合相手に均一の距離をもつからです。徐々に接近したり、あるいは離れたり、後のことは、子どもたち次第です。大人と異なり、子どもたち同志の交流の仕方は、たとえ相手が外国の子どもでも、積極的です。作品に向かう子どもたちは、言葉が通じなくとも身振り手振りでコミュニケーションをとるように、作品と対話します。時折、意味不明なものがボードに見え隠れします。はたして、子どもたちはモダンアートとどんな話をしているのでしょうか。





対象：小学校4年生以上
制作日数：2日間





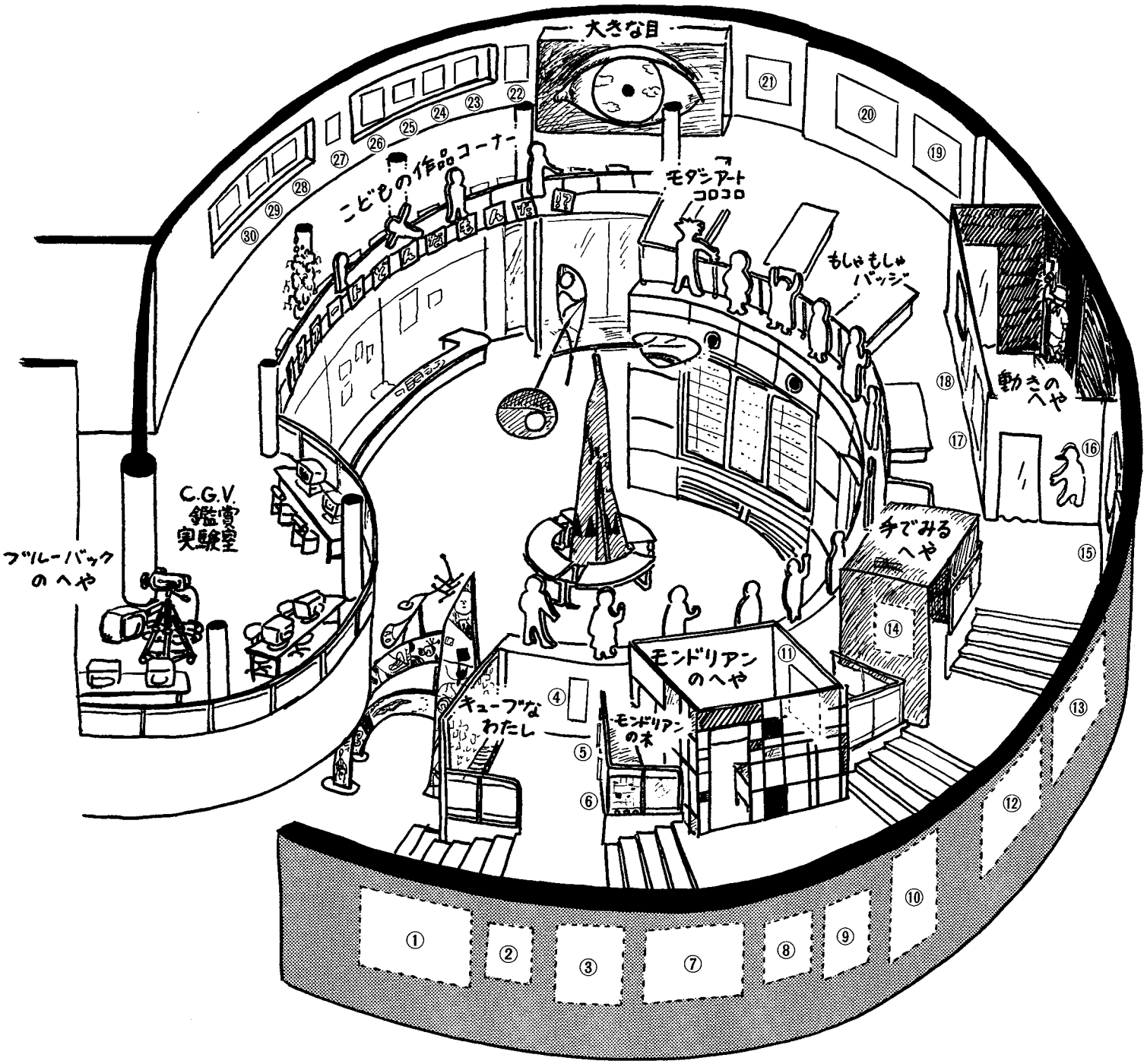
造形教室　「キューブなわたしー不思議な鏡ー」

鏡はいろいろな人の顔や身の回りの物をうつしだします。しかし鏡自体の顔は見せません。あまり、日常的過ぎて、鏡の本当の姿について考えもしません。しかしふと、気になりだすと、とても不思議です。私たちは、自分の顔をリアルタイムで見るためには、鏡、水、ビデオのモニターを通してしか見えません。水は物質的な要素が強く、鏡としての用途は二の次です。ビデオモニターは、自分自身を遠く離れた地点でみているような隔たりを感じさせます。しかし、鏡を覗き込み、自分の顔をみていると、それはまぎれもない自分としかいいようがないほど、現実的です。一方その現実性がいかに虚像であるかは、自分の目を見つめはじめ、そして、自分自身の背景に目を移すと明白になってきます。真正面に立った自分以外、つまり、見たい物しか見えないからです。これに対して、うっかり割ってしまった鏡の中に、非日常的な様子を見つけます。当然だと思って見ていた鏡の中のものが分断され、それによって、物ひとつひとつが、等価値に捉えられてくるのです。一枚の鏡でなくなった時、被写体は現実の姿をとどめなくなったにもかかわらず、視線の変化によって、偏見を洗い流されてしまっているのです。目がそれぞれの片に気をとられ、物の全体像よりも、物同志の関係が均一に空間の中に存在することを語りかけてくるのです。

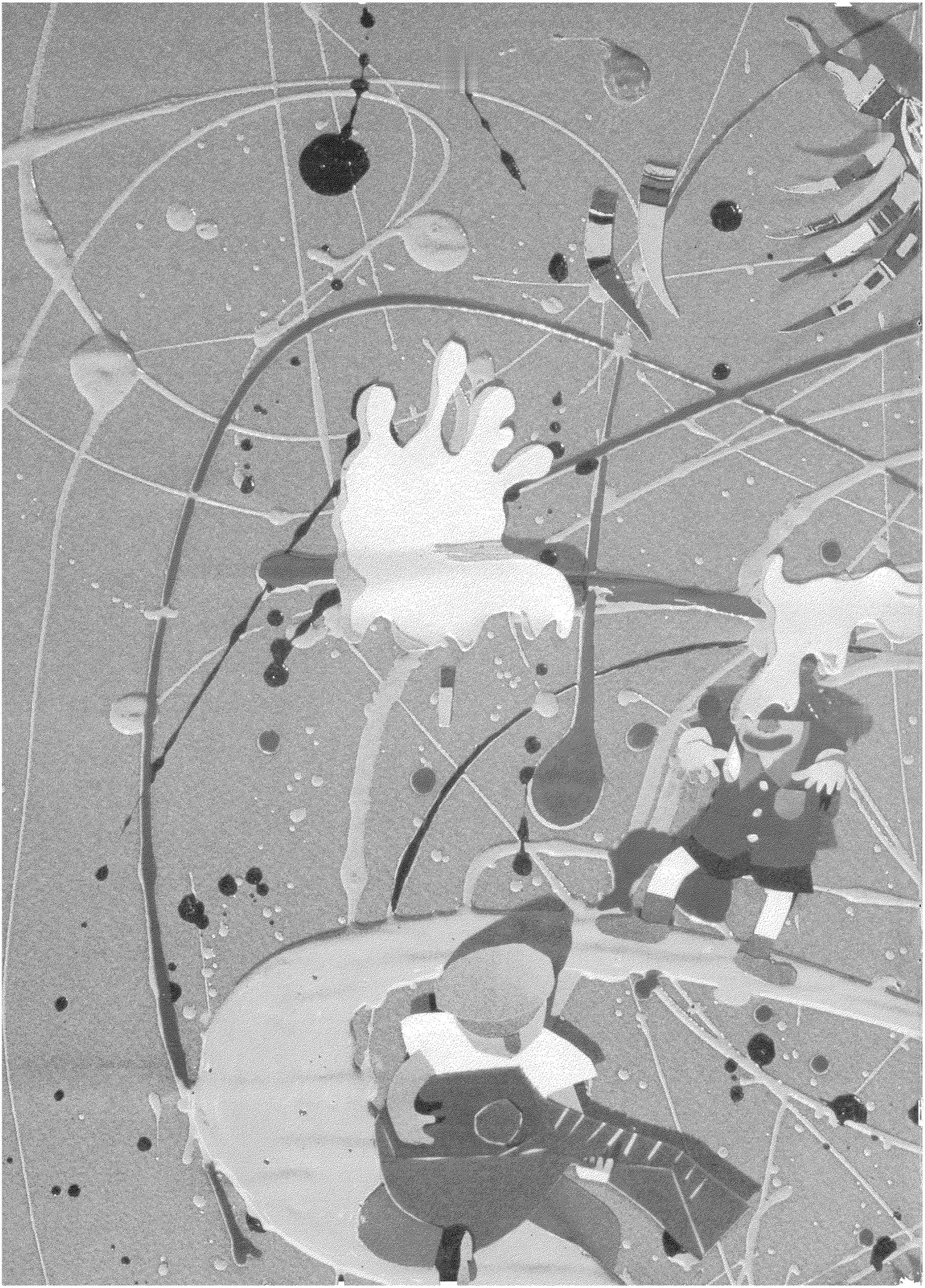
人が現実の物を見る時も、鏡の自分の顔を見入るように、焦点以外をぼやかす方法を身につけているため、好きなようにしかものを見ません。そんな身勝手な人間の目を科学的な解釈によって、絵画上に表わそうとしたのが、ピカソやブラックという画家です。物は元々多くの面を持ちそれらを平面に描くためには、物を色々な角度から見て、描かなければならないと、新たな絵画概念と技法をあみ出しました。それは、立方体をたくさん描いているように見えたので、キュビスム(立方体)と呼ばれ、その後多くの画家や彫刻家が影響を受けました。

「キューブなわたしー不思議な鏡ー」は、従来の絵画の写実的な方法とは、ある錯覚の中での状況であること。虚像をうつす鏡をこまかく切って、重ねたり角度をかえたりしてデコボコの鏡をつくることによって、虚像である世界が虚像である所以を見ることができるものです。それはまた、自分の顔をうつすと、まるでキュビスムのピカソやブラックの絵のような顔に映ることとは偶然の一致でありません。なぜなら、モダンアーティストたちの試みは、現実の日常の体験をもう一度見直すきっかけを常に私たちにあたえようとしていることが確認できるからです。

対象：小学校４年生以上
制作日数：２日間



●イラストに示してある番号は、展示されている作品（複製写真）の番号を示しています。

1 ドローネー「環状の形態」
2 ドローネー「赤いエッフェル塔」
3 シャガール「窓から見たパリ」
4 ブラック「ピアノとマンドーラ」
5 グレーズ「男の頭部」
6 ピカソ「水差しと果物鉢」
7 マルク「黄色い牝牛」
8 レジェ「花瓶を持つ女」
9 レジェ「建設現場の男たちとロープ」
10 ポロック「魔法の森」
11 モンドリアン「しょうが壷のある静物II」
12 ピカソ「水浴」
13 ピカソ「マンドリンとギター」
14 ジャコメッティ「ディエゴ」
15 エルンスト「接吻」
16 ピカビア「世にも稀なる絵画」
17 バッラ「抽象的速度と音」
18 デュシャン「汽車の中の悲しめる青年」
19 カンディンスキー「コンポジションIIのための習作」
20 カンディンスキー「さまざまな円」
21 カンディンスキー「さまざまな動き」
22 マグリット「大気の声」
23 ミロ「耕地」
24 ミロ「オランダの室内II」
25 タンギー「岬の城」
26 クレー「新しい調和」
27 デュビュッフェ「ミス・コレラ」
28 キリコ「赤い塔」
29 マレーヴィッチ「吹雪のあとの村の朝」
30 リシツキー「無題」

発行＝（財）児童育成協会こどもの城　制作＝こどもの城造形事業部　編集＝こどもの城造形事業部［Chi.Maeda＋Illustra.S.Kikuyama］　印刷＝（有）博英社 初版 1991.7.20 再版 1999.3.20